イスラーム
ISLAM

——正しい理解のために——

宗教法人 東京・トルコ・ディヤーナト・ジャーミイ
Tokyo Türk Diyanet Camii Vakfı

イスラーム

―正しい理解のために―

世界遺産に登録されているトルコ・イスタンブールのブルーモスク

目次

第三部　イスラームと社会生活　50

トルコ・イスタンブールにあるスレイマーニイェ礼拝場の内部

第一部　信仰

A　宗教とその必要性

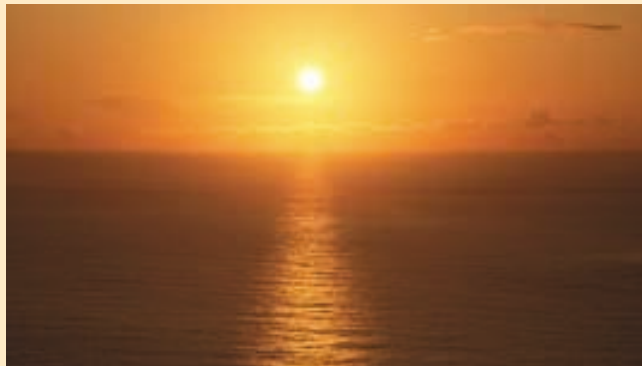
宗教は知性と認識する力を持つ人間を、その人の意志と希望により、良いこと、美しいこと、素晴らしいことへと導く神の教えであり、人として完成した状態に到達させるための最も正しい道です。イスラーム法学者のアブー・ハニーファ（西暦６９９～７６７年）は、宗教とはイーマーン（言葉による信仰告白、心による承認）、イスラーム（アッラーの教えに従うこと、服従すること）、そしてそれらにまつわるあらゆる規則のすべてを指す言葉であるとしています。

宗教は人間と神、人と人、そしてこの世の人と被造物との関係を正しく整えるものです。預言者達によって伝えられたこの神の規律は、すべての被造物を創造した理由と意図、死の先にあるもの、創造主と被造物に対して人間の果たすべき役割、何が正しく意義のあることで、何が悪で害のあるものであるかを教え、人々に真実への導きと幸福への道を示しています。

このような特質を持つ宗教を通して、人は自覚的な生を送ることができるのです。宗教は人としての価値を高め、自己中心的な考えやうぬぼれを取り除き、献身的で立派で公正な心を涵養します。真実を愛し、守ることを教えます。人を悲しみや絶望から救います。希望を持って物事にあたることや強い意志を獲得させます。そしてアッラーの御前にひれ伏し、アッラーに従うことを教えます。

人は本来、宗教を必要とする存在です。普遍的な現象である宗教は、人と共にあり、人が存在する限りあり続けるでしょう。歴史上のどの時代においても、世界のどの地域においても、宗教と無縁の人を見出すことはできますが、今日まで完全に宗教と無縁であった社会はありませんでした。人の集団があれば、そこには必ず宗教が存在するものであり、その

集団が文明的に発展しているか否かはあまり関係のないことです。
　崇高なる神はそのようなことについて次のように明らかにされています。
『それであなたはあなたの顔を純正な教えに、しっかり向けなさい。アッラーが人間に定められた天性に基づいて。アッラーの創造に、変更があるはずはない。それは正しい教えである。だが人びとの多くはわからない』（第30章第30節）
　すべての人は自分を創造し、生かし、成熟させ、この世における無数の恵みを与えてくださる偉大な存在を認識するために創造されました。人のこの特性は、クルアーンにおいて次のように示されています。
『あなたがたの主が、アダムの子孫の腰からかれらの子孫を取り出され、かれらを自らの証人となされた時を思え。（その時かれは仰せられた。）「われは、あなたがたの主ではないか。」かれらは申し上げた。「はい、わたしたちは証言いたします。」これは復活の日にあなたがたに、「わたしたちは、このことを本当に注意しませんでした。」と言わせないためである』（第7章第172節）
　預言者ムハンマドの、「すべての人は、本性すなわち純粋無垢な性質を持って生まれてくる。そして子の親が、その子をユダヤ教徒やキリスト教徒、ゾロアスター教徒

かれこそは太陽を輝かせ、月を灯明とされ、その軌道を定め、
年数（と時日）の計算をあなたがたに教えられた方である。
アッラーがこれらを創造されたのは、
ただ真理（を現すため）に他ならない。
かれは知識ある人びとに印を詳しく述べられる。
《聖クルアーン第10章第5節》

にするのだ」というハディース（預言者ムハンマドの言行録）も、本来人が生まれながらに宗教的な感情を持っていること、そして、その感情を特定の方向に導くことができることを示しています。

人は空気や水を求めるようにごく自然に、信仰やイバーダート（崇拝行為）を求めるものです。それゆえアッラーは、生命を持つすべての被造物の物質的・精神的な求めに応じてこの世を生活を営むのに適した状態に創られ、さまざまな恵みを与えられたのです。人の本性はさまざまな方向に導くことができるので、イスラームは人々の信仰とイバーダートを求める気持ちに応え、人々にアッラーの他に神がいないことを知らしめ、アッラーのみを崇拝することへと呼びかけているのです。この呼びかけは歴史上、遣わされた何人もの預言者たちを通して行われてきました。そして、アッラーは最後の預言者としてムハンマドを遣わされ、人々が望む宗教的な恵みを完成されたのです。

人間は社会的な存在であると同時に、自分の利益を優先し、自分がほしいものを手にしようとする特徴も持っています。社会にはさまざまな性格の人が存在し、その力や知恵はそれぞれ異なり、人は自分にとって良いものを得ようとする欲望を持っています。そうした人の在り方は社会に良い影響を与えることもありますが、不都合を生み出すこともあります。人と人、そして人と社会、さらに社会と人との関係において、それぞれの間で取るべき態度が正しく整えられていなければ、均衡のとれた秩序ある社会は望むべくもありません。したがってそれぞれの社会に、社会的な生活がうまくいくように整える宗教や法、道徳的規範が存在するのです。そのために、アッラーは最初の人を創造するとともに、人が従うべき規律を預言者達を通して教えられ、ムハンマドを最後の預言者とされ、自らのメッセージを下されたのです。

B　イスラームと他の宗教

社会的・人間的な事柄である宗教には二つの立場があります。その源が神の啓示によるもの、もしくは人が考え出したものに依拠するものです。イスラームでは、宗教とは神の啓示に依拠するものと認められています。クルアーンには、『本当にアッラーの御許の教えは、イスラーム（主の意志に服従、帰依すること）である』（第3章第19節）と述べられています。

かれらは上を飛ぶ鳥について考えないのか。
翼を広げ、またそれを畳むではないか。
慈悲あまねく御方の他、誰がそれらを支えることができよう。
本当にかれは、すべてのことを御存知であられる。
《聖クルアーン第67章第19節》

この節で言及されているイスラームとは、アダム以来のすべての預言者達がアッラーから与えられ伝えてきた教えに共通した基本のすべてを含むものです。クルアーンではこの点について、『かれがあなたに定められる教えは、ノアに命じられたものと同じものである。われはそれをあなたに啓示し、またそれを、アブラハム、モーゼ、イエスに対しても同様に命じた。「その教えを打ち立て、その間に分派を作ってはならない」』（第42章第13節）とされています。

さらにクルアーンの第3章第3節・4節ではユダヤ教やキリスト教を宗教として、そして旧約聖書や新約聖書を啓典として認めるとともに、他方彼らが過ちを犯したことを批判し、アッラーの啓示を歪曲したことを非難しています。一方クルアーンの第2章第62節ではユダヤ教徒、キリスト教徒、サービア教徒でアッラーと最後の審判の日を信じ、善行にいそしむ者は、神から報奨を授かると明言しています。

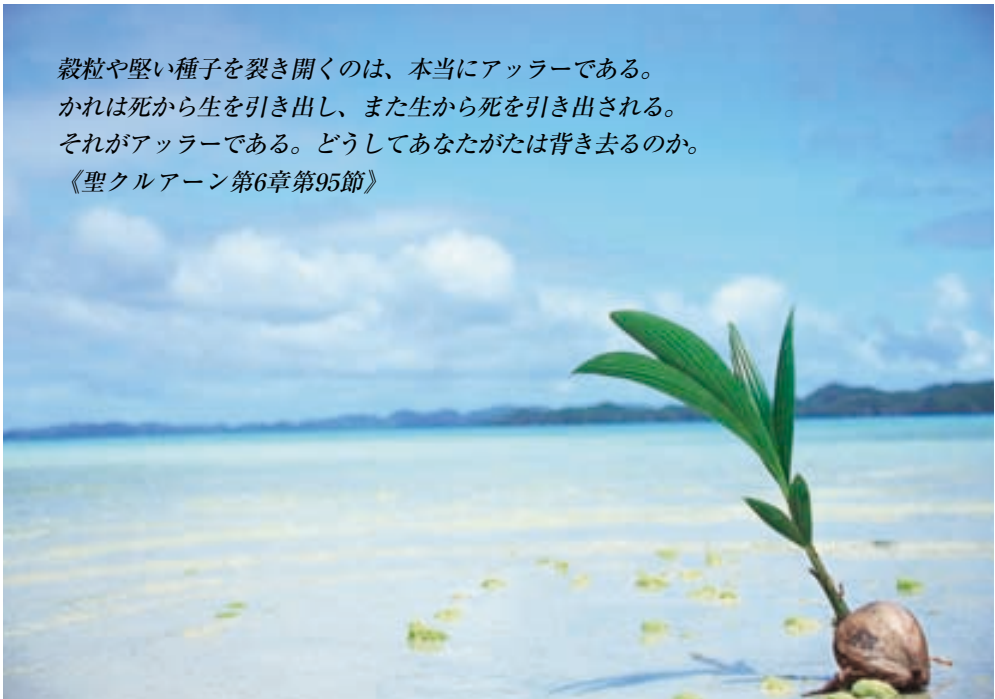
イスラームは人間の考えに依拠するさまざまな他の宗教を現象として認めてはいるものの、それらを信じている人々が「タウヒード」（神の唯一性）を受け入れ、アッラーを他のものと並べ崇めることなく帰依し、イバーダート（崇拝行為）を行うことへと呼びかけ導いています。また、アッラーはこの呼びかけに応じない人々を中傷す

ることを禁じています。そのことはクルアーンの第6章108節に示されています。

クルアーンに『宗教には強制があってはならない』（第2章第256節）とあるように、イスラームは宗教の選択に関し、人々に完全な自由を与えています。そして、ムスリム（イスラーム教徒）は誰に対しても宗教を強制してはいけないということともに、自分たちに害が及ばない限り原則としてムスリムではない人々とも友好関係を築いていくべきだ、とクルアーンでは説明されています。

『アッラーは、宗教上のことであなたがたに戦いを仕掛けたり、またあなたがたを家から追放しなかった者たちに親切を尽し、公正に待遇することを禁じられない。本当にアッラーは公正な者を御好みになられる。アッラーはただ次のような者を、あなたがたに禁じられる。宗教上のことであなたがたと戦いを交えた者、またあなたがたを家から追放した者、あなたがたを追放するにあたり力を貸した者たちである。かれらに縁故を通じるのを（禁じられる）。誰でもかれらを親密な友とする者は不義を行う者である』（第60章第8・9節）

歴史を振り返って見ると、イスラーム社会においては当初から、ムスリムでない者に対し宗教への介入が行なわれず、宗教上の自由が完全に保証されていたことがわ

穀粒や堅い種子を裂き開くのは、本当にアッラーである。
かれは死から生を引き出し、また生から死を引き出される。
それがアッラーである。どうしてあなたがたは背き去るのか。
《聖クルアーン第6章第95節》

かります。預言者ムハンマドの時代以来、ムスリムでない者との間に結ばれた協定では、彼らに宗教と良心の自由を保証し、宗教上必要なことを自由に行うことができるということが明白に記されていました。自分達の信仰を守り、神殿を造り、それぞれの教えに応じた崇拝行為を行い、子供達に宗教教育を施すといったような基本的な権利と自由が与えられていたのです。ただ公共の秩序にかかわることについては、一定の制限が設けられていました。イスラーム社会においては、キリスト教をはじめその他の宗教の教会を寛容に受け入れ、その偶像、モザイク、絵、鐘、十字架など式典に用いられるものに対して制約が加えられることはありませんでした。また彼らの墓地も今日まで守られてきました。

C　イスラームの教えの源

偉大なアッラーは人々に、預言者達を通し個人的・社会的な営み全般を秩序立てる基本的な事柄を教えられました。したがってイスラームとは、神の啓示のすべてが個人的・社会的生活において、預言者の指導によって実現され形成された最後の聖なるシステムなのです。この観点から、クルアーンとスンナ（預言者ムハンマドの言行）はイスラームの教えの二つの基本的な源となっているのです。

ただ社会生活にはさまざまな側面があり、それは時代とともに変わりやすいものであるため、その時々に生起するすべての多様な問題について、必ずしもクルアーンやスンナではっきりした判断が示されているわけではありません。このような状況においては、クルアーンとスンナを基にしつつ、イジュティハード（学者達による解釈のための努力）によって新しい問題の解決策が探られます。預言者ムハンマドが教友であるムアズ・ビン・ジャバルを指導者としてエチオピアに送り込んだとき起きた出来事として知られ、伝えられているところによると、預言者ムハンマドはクルアーンとスンナ、そして学者達によるイジュティハードを宗教的判断の根拠として認めていました。

イジュティハードにはまず第一に、クルアーンやスンナには言及されていない事柄を判断する場合、クルアーンもしくはスンナで判断が示されている例を参考にして説き明かすキヤース（類推）があります。預言者ムハンマドの教友達の見解や慣習、有益なものを選び有害なものを避けるという原則、何かを否定する理由がない限りその存在を受け入れるとい

う原則、悪へと導くものも禁じられているという原則なども、解釈と見解を示す時の基準となっています。クルアーン、スンナ、そしてイジュティハードによって出された判断について、同時代に生きているすべての学者たちの意見が一致した場合に、そのことをイジュマー（合意）と呼びます。イジュマーによって得られた判断はキヤース（類推）の判断よりも重きを置かれます。クルアーン、スンナ（預言者ムハンマドの言行）、イジュマー、そしてキヤースがイスラームの教えの根拠であるという点においては、学者達の見解は一致しています。それゆえ、これらはイスラームの教えの根本的な源と言われています。つまり、イスラームの教えの根拠は大元の部分でクルアーンとスンナにあり、それ以外はこの二つの源から何らかの見解を導き出すための方法と見ることができます。

1　クルアーン

イスラームの教えの第一の源であるクルアーンは、崇高なるアッラーから預言者ムハンマドに幾度にもわたってアラビア語で下された啓示が、世代から世代へと途切れることなく伝えられ書き残され、書物としてまとめられたものです。その内容はファーティハ（開端）章から始まり、ナース（人間）章で終わり、１１４章６２３６節で構成される神の言葉です。啓示とはアッラーが人々に伝えようと望まれたメッセージを、直接もしくは天使ガブリエルを通して預言者たちに伝えられたものです。

預言者ムハンマドは二三年もの間、クルアーンを自らに啓示された通りに章句として人々に伝え、それを常に記録者に書き留めさせ、また暗誦者に暗記させせました。さまざまなものに書き留められていた章句は、のちに第一代カリフ、アブー・バクルの時代に一冊の本としてまとめられました。そして第三代カリフ、オスマーンの時代にその本は書き写され、イスラーム諸地域のさまざまな都市に送られました。アッラーが人々に伝えようと望まれたメッセージである啓示は、イエスなど他の預言者たちにも下され啓典として編まれていますが、預言者ムハンマドの時代から現在に至るまで記述と暗誦によって伝えられてきたクルアーンは、諸啓典のうち神から下されたままの形を保持している唯一の啓典です。

アッラーの言葉であるクルアーンは、人間がつくりだせるものではないという特徴の他、イスラームの教えの信条やイバーダート（崇拝行為）、道徳や法に関する多くの決まりごとが示されているという明確な特徴を持っています。

そこではアッラーの唯一性、アッラーの特質、来世での生、天国や地獄についても説明されています。さらにクルアー

ンは人々に教訓を与え注意を促すため、以前の預言者達や人々について言及し、過去の歴史的・社会的出来事を含む挿話を伝えています。クルアーンは人々に公正に振舞い、アッラーを畏れ罪から遠ざかることを命じ、人々に教訓と導きを与えています。

クルアーンはまず人々をタウヒード（神の唯一性）、すなわちアッラーだけを知り信じることへと呼びかけています。このことを知ることができるように、アッラーによる世界の創造とこの世界における均衡を深く考えるよう、人を導きます。人はこの導きによって、万物が単純な次元から形成されているものではなく、人の理解を超越した形而上学的次元の存在することを知るのです。

クルアーンにおいて生とは、私達が生きている現世だけのものではなく、死によって終わりを迎えることなく、来世においても永続するものと説かれています。そして来世における生を獲得できるか否かは、人の現世における行いに左右されます。アッラーが望まれ信者の義務とされている崇拝行為であるイバーダートや宗教上の行為を実践すること、そしてアッラーが望まれず神によって禁止されていることであるハラームを避けることが、クルアーンの中において幾度となく明記されているのはこのためで

独特のアラビア語の書体で図案化されたハディース（預言者ムハンマドの言行録）の一つ。その意味は「知識のある者こそもっとも尊い地位にある」

す。こうした行いによって、人やその集団は現世と来世の幸福を得ることができるのです。要するにクルアーンは、唯一の神アッラーを信じることにより、公正で道徳的な行動をとることのできる人間と社会の形成を目指しているのです。

2　スンナ（預言者ムハンマドの言行）

預言者ムハンマドの行動や言葉であるスンナは、クルアーンに次ぐイスラームの第二の源であり、それはいくつかの内容に分類されます。

・言葉によるスンナ　預言者ムハンマドが何らかの事柄について言及したもの。
・行動によるスンナ　教友達が目撃し伝承したもの。
・黙認のスンナ　預言者ムハンマドの御前で教友達が語った言葉、もしくは取った行動のうち、預言者ムハンマドが否定されなかった事柄、あるいは同意され良い反応を示されたもの。

クルアーンには、スンナが宗教上の判断の根拠であることを示す次のような章句があります。

『言ってやるがいい。「あなたがたがもしアッラーを敬愛するならば、わたしに従え。そうすればアッラーもあなたがたを愛でられ、あなたがたの罪を赦される。アッラーは寛容にして慈悲深くあられる』（第3章第31節）

『使徒に従う者は、まさにアッラーに従う者である。誰でも背き去る者のために、われはあなたを見張り人として遣わしたのではない』（第4章第80節）

『信仰する男も女も、アッラーとその使徒が、何かを決められた時、勝手に選択すべきではない。アッラーとその使徒に背く者は、明らかに迷って（横道に）逸れた者である』（第33章第59節）

神からの啓示を根本とするイスラームは、預言者ムハンマドの行動や振舞い、言葉を通

人びとよ、一つの比喩を説くから、それを謹んで聞きなさい。本当にあなたがたがアッラーの他に祈るものは、たとえかれらが束になっても、一匹の蝿（さえ）も創れない。また蝿がかれらから何か奪い去っても、それを取り戻すこともできない。祈る者も、祈られる者も、全く力がないのである。《第22章第73節》

して人々の実生活の中に取り入れられ、実践されてきました。神の命令をいかに実践するか、その命令がどういう意味なのかということについて、ムスリムが最初に頼るべき源が、預言者ムハンマドの行動と言葉なのです。つまり、スンナであり、スンナをまとめたのがハディース（預言者ムハンマドの言行録）です。預言者ムハンマドのスンナは、二つに分類されます。一つ目は従うべきスンナで、「スンナティ・フダー」と呼ばれます。これには預言者ムハンマドの信仰やイバーダート（崇拝行為）、人徳などがあり、宗教的な決まりを解釈し完成させるための言葉や行動です。二つ目は「スンナティ・ザワーイド」で、日常生活における預言者に固有の行動や言葉です。たとえば食事の習慣や芳香油を用いたこと、家族の長そして国家の長として示された態度や行動が、これにあてはまります。こうしたスンナは宗教的義務ではないのですが、預言者ムハンマドへの愛情や敬意の表現として、ムスリム（イスラーム教徒）たちによって実行されることが望ましいものです。

D　イスラームの特徴

1　タウヒード（神の唯一性）

言葉として「一つとする」を意味するタウヒードは、イスラームにおいては人がアッラーの存在やその唯一性、すべての崇高な特性がアッラーに存在すること、アッラーは完全無欠で、無比のお方であられることを知り、それを信じることを意味しています。この信仰の核心は「ラー・イラーハ・イッラッラー」（アッラーの他に神なし）という言葉で表現されます。そのためこの言葉は「タウヒードの言葉」と呼ばれています。クルアーンでは、アッラーの特性、唯一性、万物や人間とのかかわりの観点から、タウヒードは次のように説明されています。

アッラーは唯一であられ、何ものをも必要とされず、子どもをお産みになることも、お生まれになることもありません。アッラーに類するものはなく（第112章第3・4節）、人が配するものの上に高くおられます（第39章第23節）。

天や地にアッラー以外の神が存在していたとすれば、この世界の均衡が崩れていたことでしょう（第21章第22節）。アッラーに息子や娘があると話す者はアッラーを中傷したことになります（第16章第57節、第10章第68節）。アッラーはど

のような集団や人に対しても、より近いことも遠いこともない存在であり、等しく皆を導かれるお方です（第２章第１８６節、第1章第2節）。
　アッラーは絶対的な力の持ち主であられ、すべてのものが帰りつくところはアッラーの御許です。アッラーは創造主であられ、創造の時を開始され、すべてを創造され、無から有を生み出され、それに形を与えられたお方です。すべてを支配され、創造されたものを守られ、保護されます。アッラーは力の主であられ、慈悲深く、糧を与えられます。英知の持ち主であられ、人々を庇護され導かれるお方であられ、困難のうちにある者に助けを送られます。アッラーはすべての善の源であられます。あらゆる欠点から遠いところにおられます。創造されたものたちに常に恵みを与えられ、決して苦しめられることはありません。（第2章第２５５節、第59章第22節～24節、第42章第19節、第４章第40節）
　タウヒード（神の唯一性）は、比類なきお方アッラーへのイバーダート（崇拝行為）、アッラーを愛すること、イフラース（純誠）とすべてをアッラーに託すことによって彼に結びついていること、さらにアッラーから求めること、助けを願うこと、彼を信頼すること、どのような点においても何ものもアッラーと同等にみなさないこと、アッラー以外に崇拝すべき対象は存在しないという

また大地を、生あるもののために設けられた。
そこに果実があり、（実を支える）さやを被るナツメヤシ、
殻に包まれる穀物と、（その他の）賜物。それであなたがたは、
主の恩恵のどれを嘘と言うのか。
《聖クルアーン第55章第10節～13節》

ことを知り、必要に応じてそれを表明することです。

アッラーが命じられたことに喜んで従い、ハラーム（禁止されていること）を避け、アッラーが愛されるものに愛情を示すこと、アッラーが愛されないものから顔を背けること、アッラーが下された規則に従うこと、それを実行すること、預言者の示された道を歩むことなどもまた、タウヒードが要求する事柄です。単に理論的にアッラーを信じているというだけでは不十分で、これらの信条を行動で示し信仰を支えることが必要なのです。信心とイバーダートを獲得した信仰は、現世的なあらゆる態度や行動を方向づけ、真のタウヒードを反映するものです。唯一の神を信仰することは、預言者達からもたらされた教えの中で最も重要で不変の教えなのです。

2　普遍性

アッラーは人の置かれた条件や可能性、社会的・文化的環境、そしてその人の求めるものに応じて教えを下されます。その教えには、人々の言語や地理的・歴史的な違いはあるものの、信仰の基本とイバーダート（崇拝行為）、そして公正さ、正義、愛情、援助といった概念が善いものとされ、それに対立する概念が悪とされるといったように基本的な点は共通しています。啓示を源としているすべての宗教は本来同じものであり、イスラームは最初の人間と預言者アダムの時代に始まる啓示を継承し、預言者ムハンマドに下された最後の啓示をもって完結したのです。したがってイスラームは普遍性を有し、世界のさまざまな地域で暮らす人々と審判の日に至るまでのすべての時を包括しているのです（第3章第19節・第83節・第85節、第34章第28節）。

イスラーム以前の諸宗教は、特定の時期、あるいは特定の集団のみを対象としました。しかし、イスラームはすべての時間と空間を対象としています。クルアーンを見ても、「すべての人々よ」「アダムの子孫達よ」といった普遍的な呼びかけが用いられ、イスラームが特定の集団だけではなくすべての人々を対象としていることがわかります（第34章第28節、第25章第1節、第7章第158節）。預言者ムハンマドも、「これまでの預言者達は自らの部族にのみ遣わされてきたが、私はすべての人々に遣わされた」と述べています。

イスラームは人を社会的な立場や性別によって区別することはありません。その原則はすべての個人的・社会的な生活のあらゆる場面に光を与えています。サラート（礼拝）やサウム（断食）のような個人的なイバーダートであっても、社

イスラームは人種・民族の違いを越えた普遍的な宗教です

会的な意義が込められています。だからといって、それらは人々が個人としてこの世の恵みや利益を享受するのを阻むものではありません。人は現世と来世の間のバランスをとり、過度に一方に片寄らないようにし、現世と来世双方の生をより良いものとするために努力することが必要です。

今日、普遍的なものとして認められている物事の概念は、イスラームにその基盤を見出すことができます。イスラームは人権、正義、安全、公正、気前のよさ、人を歓待すること、平等、新しいものを受け入れること、老人や子供や女性の権利を保護すること、労働に価値を置くこと、寛容であること、仕事をそれにふさわしい人に与えること、といったような普遍的な原則のすべてを説き、また奨励しています。

3　知に重きを置くこと

知性はアッラーから人に与えられた精神的な力です。人はこの力によって必要な知識を得、善と悪、有益なものとそうでないものを区別することができます。信仰は知性の上に構築されます。イスラームでは宗教上の責任も、人が知性や物事を認識する力を持っていることを前提としています。知性が伴っていない場合は責任を負っているとはされず、命令や禁止事項に従う必要もありません。つまり、イスラームでは知性的であることが基本的原則とされており、そのため一時的であっても知性の働きを妨げる飲酒や麻薬を用いることなどが禁止されているのです。

クルアーンは人々に知性を働かせ、この世界で起きている出来事について深く考えるように命じています。アッラーの存在やその唯一性も、知性を働かせることによってのみ理解できるのです。また人の存在の理由、生の意味や意図、どのように何に従って生きるべきか、死後はどうなるのか、といったような啓示に由来する形而上学的な問いも、知性を用いることによってその意味を理解することができるのです。よく考えることが強調され、既知のことから未知のことを考え出すことが求められているのです。人は知性によって、自分自身や他の被造物、そしてあらゆるシステムに見られる完全さを理解し、それらをアッラーが創造されたのだと把握し、死や運命を理解することができるのです。したがってクルアーンでは「なぜ考えないのか」と問い、人々を考えることへと招き導いているのです（第12章第１０９節、第21章第10節、第23章第80節）。反対に、知性を十分に働かせない人や、物事を深く考えない人を非難しています（第21章第67節）。

宗教上の命令は知性を持つ人々に対してなされ、それを理解して実践するという点において、知性は最も優先されるも

のです。知性はここでは疑念をもたらすものとしてはみなされず、逆に信仰やイバーダート（崇拝行為）の土台の上に存在するものであると考えられています。知性の産物であるキヤース（類推）は、イスラームの四つの大きな源の一つとして認められ、イスラーム法の判断の基本としてしばしば用いられています。

イスラームの学者達によれば、神の啓示は健全な知性を有する人が受け入れられないようなものはいっさい含んではいません。なぜなら、知性に訴えかける宗教が道理に適っていない教えを持つことは、そのこと自体に矛盾をはらんでいるからです。アッラーが預言者達を通してはっきりと説かれた信仰やイバーダートに関する基本的な事項には、知性によって新しい解釈を加えるような余地はありません。ただし、判断が明白に下されている変化のありえないことを除き、日常生活において変化する条件や出来事に対して、教えの基本や原則に適った形で解決策や新たな判断を見出そうとすることは、知性に与えられた任務なのです。

4　人類愛と寛容

クルアーンでは人間について、『本当にわれは、人間を最も美しい姿に創った』（第95章第4節）『またわれが創造した多くの優れたものの上に、かれらを優越させたの

かれこそは、慈悲に先んじて吉報をもたらす風を送られる御方である。
それが（雨を）含んだ重い雲を運べば、
われはそれを死んでいる地に送って雨を降らせ、
これによって各種の果実を生産させる。
われはこのように死者を甦らせる。
恐らくあなたがたは悟るであろう。
《聖クルアーン第7章第57節》

である』（第17章第70節）と記されています。イスラームでは被造物を創造者ゆえに愛し、人に慈悲深く接することはアッラーへの信仰を完全なものへと導くものです。人が慈しみ深くあることは、創造主と自分自身に対する義務です。人が生まれながらに持っている権利は、侵害されてはならないと考えられています。信仰や性別、民族的起源、社会的地位などは、その人に与えられた人間としての価値に影響を及ぼすようなことがあってはなりません。人はアッラーが創造された完全な存在である、との考えのもとで振舞わなければならないのです。

イスラームでは、すべての人に寛容な精神をもって接することを大切にしています。クルアーンでは完成された信者の特質を、『怒りを押えて人びとを寛容する者』（第３章第１３４節）と表現しています。

『万有への慈悲』（第21章第１０７節）、『立派な模範』（第33章第33節）として遣わされた預言者ムハンマドは、人が互いに愛情や敬意を持つことを望みました。そして、ハディース（預言者ムハンマドの言行録）では、「あなた方がお互いを愛さないのであれば、真の意味で信仰を持ったとは言えない」と述べています。また他のハディースでは、「信仰する人々を一つの身体」にたとえています。

寛容とは異なる言葉・性・宗教・信仰を持った人達を嫌悪せず、理解を持って対応するということであり、社会生活において欠かせない態度なのです。なぜなら人々の考え方や意図、目標や方法は、多くの場合それぞれ異なっており、いつでも何についても同じように考えることは不可能だからです。寛容はイスラーム社会の最初期から存在するものでした。預言者ムハンマドは寛容を意味する「ムサーマハ」という言葉を用い、それを実践しました。寛容は預言者ムハンマドの際立った特性の一つです。周囲のムスリム（イスラーム教徒）に対するのと同様に、他の宗教を持つ人々に対しても寛容であり、敬意を持って振舞いました。布教に際しては、異なる信仰を排除せず、偶像崇拝を行うアラブ人やユダヤ人ともマディーナ条約（預言者ムハンマドがマッカからマディーナへと移住した直後に結ばれた条約）を結び、彼らの信仰や思想、生命や財産を保証しました。キリスト教徒の一団がムスリムの礼拝所で崇拝行為を行うことを許可したことも、預言者ムハンマドの寛容を示す一例です。

E　イーマーン（信仰）の定義とその基本

かれこそは、雨を天から降らす方である。
われはこれをもってすべてのもの（植物）の芽を萌え出させ、次に新緑（の群葉）を出させ、累々と穀物を実らせる。
またナツメヤシのさやから、（重く）垂れ下がった房（を生え出させ）、またブドウ、オリーブ、ザクロ等、同類異種の果樹（を育てる）。
その果実が結び、そして成熟するのを観察しなさい。
その中には本当に信仰する人びとへの印がある。
《聖クルアーン第6章第99節》

1　信仰の定義

アラビア語で承認すること、信頼することを意味するイーマーンという言葉は、宗教用語としては、アッラーの存在とその唯一性、そしてムハンマドが預言者であり、人々に伝えた教えが正しく、真実であることを信じるという意味になります。信仰は基本的に、その対象となるべきものを心から承認することです。これを言葉として口に出すのは、他者にその人がムスリムであることを知らせるためです。信仰は「理解を伴わない信仰」と「理解を伴う信仰」の二つに分けることができます。理解を伴わない信仰とは、信仰すべき対象を全体としてまとめて信仰することです。これはタウヒード（神の唯一性）の言葉と言われる「アッラーの他に神はなし、ムハンマドはその使者である」という文言によって表現されます。理解を伴う信仰とは、信仰するべき事柄すべてを個々に認識、理解し、そのすべてを疑うことなく信仰することです。

2　信仰の基本

信仰の基本について預言者ムハンマドは、天使ガブリエルの事件として知られるハディース（預言者ムハンマドの言行録）の中の一つで、「信仰とはアッラーを、天使達を、諸啓典を、預言者達を、審判の日を、運命を、善も悪もア

ッラーが創造されたゆえに存在する、と信じることである」と説明しています。それぞれの信仰の内容は以下の通りです。

a　アッラーへの信仰

アッラーの存在と、その唯一性。創造され、生かされ、糧を与えられるのはアッラーだけであること。アッラーの他に神はなく、アッラーに比類するものは何もないこと。すべての完成した特質を備えておられ、欠点のない完全な存在であられることなどを信じることです。

b　天使への信仰

天使は光から創造され、優美な存在であること。飲み食いや男女の区別、眠るといった人間的な特性は持たないこと。天使はアッラーに反逆することなく、アッラーへのイバーダート（崇拝行為）と服従のうちにあり、アッラーのご命令によってさまざまな形になり得る目に見えない存在である、と信じることです。

c　啓典への信仰

崇高なるアッラーが人々にメッセージを伝えるため、預言者に下された書のすべてを信じることです。モーゼには「律法」、ダビデには「詩篇」、イエスには「福音書」、そして預言者ムハンマドにはクルアーンが下され、さらに他の預言者達の一部にも神のメッセージが数枚の紙によって与えられています。諸文献によると、アダムに10ページ、シートに50ページ、イドリースに30ページ、アブラハムには10ページが与

われは天と地、またその間にあるものを、戯れに創ったのではない。
《聖クルアーン第21章第16節》

えられています。クルアーン以外の啓典は、部分的に書き換えられ、啓示された時の原型が保たれていませんが、クルアーンはアッラーから下された通りの形を維持してきました。そして、それは最後の審判の日まで維持されるでしょう（第15章第9節）。

ｄ　預言者たちへの信仰

アダムからムハンマドまで、それぞれの集団に預言者が遣わされ（第35章第24節、第57章第25節）、預言者達はアッラーのご命令と禁止事項、合法・非合法と定められた事柄や物事の原則、勧められていることなどを人々に伝え、彼らの模範となったと信じることです。預言者達は人としての本性も言葉も態度も正直で信頼でき、優れた知性を持った罪のない人々です。クルアーンの中には預言者達のうちの二十五名が登場しています。

ｅ　審判の日への信仰

人々は死後、再び復活させられ、広い空間に集められ、この世で行ったすべてのことを問われ、信仰したか否か、服従したか否か、その状況に応じて天国もしくは地獄へ行くと信じることです。

ｆ　カダル・カダー（宿命）への信仰

アッラーは初めから終わりまで、それぞれの出来事の時間や空間、物事のあり方や特質、すなわち物事がどういう形でいつ起こるのかということを、それが起こる前からお知りになり、その通りに確定され（カダル）、大昔に確定された物事が時が来るとそれぞれアッラーのご存知の通りに起きる（カダー）と信じることです（第57章第22節）。カダーとカダルはアッラーの知識と意志にかかわっていることがらなのです。

信仰が真正であるには、

・信仰に疑念を抱いていないこと（第49章第15節）
・信ずべき事柄のすべてを信じていること（第2章第85節）
・死の直前に信じたのではないこと（第4章第18節、第40章第85節）
・信仰に他の神への信仰が混じっていないこと（第6章第82節）

などが必要です。これらの条件が一つでも欠けていれば、それは真の信仰ではありません。

F　信仰と実践との関係、及び信仰が日常生活に反映されていること

ここでいう実践とは、人がイスラームの教えを生活において実践する、という意味です。イスラームでは、信仰は単に哲学的な信念や考え方から成り立つものではありません。信仰する者は信仰上必要不可欠なものとして、アッラーのご命令や禁止事項を守り、ハラール（勧められていること）やハラーム（禁止されていること）、忠告や提言などに従い、クルアーンの示す徳を身につける必要があります。信仰はイバーダート（崇拝行為）を要求し、イバーダートは徳と誠実さを要求します。崇高なるアッラーはクルアーンで、次のように命じられています。

『あなたに啓示された啓典を読誦し、サラート（礼拝）の務めを守れ。本当にサラートは、（人を）醜行と悪事から遠ざける。なお最も大事なことは、アッラーをズィクル（唱念）することである。アッラーはあなたがたの行うことを知っておられる』（第29章第45節）

『信仰する者よ、あなたがた以前の者に定められたようにあなたがたに斎戒が定められた。恐らくあなたがたは主を畏れるであろう』（第2章第１８３節）

信仰する者は、日に五回のサラート（礼拝）やラマダーン（イスラーム暦の九月）にサウム（断食）を行わなければなりません。そしてサラートやサウムは、彼をあらゆる禁止されていることや悪から遠ざけます。

預言者ムハンマドは、「あなた方のうち誰かが断食していれば、醜い言葉、悪い言葉、下品な言葉を使ってはいけません。誰かがあなたに喧嘩を仕掛けてきたら、私は断食中です、と言うようにしなさい」（ハディース＝預言者ムハンマドの言行録）と述べています。また「誰であれ、偽りの言葉、そして偽りによって物事を行うことを止めれば、アッラーが彼に食べ物や飲み物を与えないことはない」（同）とも語っています。「アッラーの使徒よ、イスラームについて私に良い言葉を教えてください。あなた以外の誰にも尋ねません」と教友が質問した時、「アッラーを信仰しました、と言いなさい。そして誠実でありなさい」（同）と答えています。

したがって、信仰が要求しているサウムやサラートを行う信者は、嘘、嘘の証言、陰口、中傷、策略、陰謀、窃盗、賭博といった悪い言葉や振舞いを遠ざけ、また言葉や態度において誠実でなければならないのです。実際クルアーンには、

『それであなたと、またあなたと共に悔悟した者が命じられたように、（正しい道を）堅く守れ』（第11章第112節）と記されています。
　クルアーンの多くの章で、「信じなさい」という命令とともに、『（常に）実直な言葉でものを言いなさい』（第33章第70節）、『虚偽の言葉を避けなさい』（第22章第30節）、『厳正に平衡を旨とし量目を少なくしてはならない』（第55章第9節）、『正義に基いた証人であれ』（第5章第8節）、『約束を守りなさい』（第5章第1節）、『私通（の危険）に近づいてはならない』（第17章第32節）、『孤児が力量（ある年齢）に達するまでは、最善（の管理）をなすための他、かれの財産に近づいてはならない』（第17章第34節）、『正当な理由による以外は、アッラーが尊いものとされた生命を奪ってはならない』（第17章第33節）、『信仰する者よ、邪推の多くを祓え。本当に邪推は、時には罪である。無用の詮索をしたりまた互いに陰口してはならない』（第49章第12節）、『度を越してはならない』（第7章第31節）、『あなたがたの財産を、不正にあなたがたの間で浪費してはならない』（第4章第29節）、『親に孝行しなさい。もし両親かまたそのどちらかが、あなたと一緒にいて老齢に達しても、かれらに「ちぇっ」などと荒い言葉を使わず、親切な言葉で話しなさい』（第17章第23節）、『なんじの手を、己の首に縛りつけてはならぬ、また限度を越え極端

彼らは頭上の天を見ないのか。
わらが如何にそれを創造し、如何にそれを飾ったか。
そしてそれには、少しの傷もないと言うのに。
《聖クルアーン第50章第6節》

に手を開き、恥辱を被り困窮に陥ってはならぬ』（第17章第29節）とあるのは、信仰は生活の全般に影響を及ぼすべきである、ということを示しています。

信仰上すべきことを行なわず、命令や禁止事項に従わない信者は、イスラームから逸脱してはいないが、罪を犯し反逆したことになります。来世での審判はアッラーに任され、アッラーが望まれれば彼は許され、そうでなければ罰が与えられます。

G　命令や禁止事項に含まれる英知

アッラーの美名の一つが、ハキーム（英明）です。ハキームとはすべての業や判断が正しく、目的に適ったものであり、創造した万象を完全に確かな形で存在させ、それらを熟知するという意味です。

クルアーンは、アッラーはすべてのものを最も美しい形で創造され、目的を伴わない無駄なもの、あるいは単なる楽しみとして創造されたのではないことを知らしめています。全世界の均衡と調和もまた、アッラーの英知を示すものです。

クルアーンでは、多くの章においてアッラーは英明であられると指摘されています。たとえば、『誠にアッラーは、偉力ならぶものなく英明であられる』（第2章第２２０節）、『本当にアッラーは全知にして英明であられる』（第9章第28節）、『アッラーに優る裁判者があろうか』（第5章第50節）などです。

アッラーのすべてのご命令と禁止事項には、多くの英知が含まれています。その中にはしもべに理解できるものもあれば、できないものもあります。アッラーが定められたすべての法に共通する目的は、しもべたちに益をもたらし害を防ぐことです。宗教上の法には五つの根本的な目的があり、それは命を守ること、知能を守ること、次世代を守ること、財産を守ること、そして宗教を守ることです。実際、命を守るために人を殺すことが禁じられ、正当な権利なく人を殺す者には来世での罰が警告されています。知能を守るためにアルコールや麻薬が禁じられています。次世代を守るために結婚が勧められ、婚姻外の関係や中絶、貞操の侵害を禁じています。財産を守る目的で窃盗や略奪、海賊行為、詐欺、利子が禁止される一方、商業が奨励されています。宗教を守る目的では、強い信仰心、サラート（礼拝）・ザカート（喜捨）・サ

あなたがたは思い起さないのか。アッラーは天にあり地にあるすべてのものを、
あなたがたの用のために供させ、また外面と内面の恩恵を果たされたではないか。
だが人びとの中には、知識も導きもなく、
また光明の啓典もなく、アッラーについて論議するものがある。
《聖クルアーン第31章第20節》

ウム（断食）・ハッジ（巡礼）のようなイバーダート（崇拝行為）、アッラーと預言者ムハンマドへの帰依、アッラーのために奮闘努力することが命じられ、アッラーと預言者ムハンマドへの反逆、権利を超越した行為、不信心者に秘密を打明けること、他の宗教・宗派の人々が崇拝する存在や聖なるものとみなしている存在を侮辱することなどは禁じられています。

H　アッラーへの愛

アッラーが与えられた最も重要なものの一つが愛情です。愛情とは人を他の人、あるいは何か他の存在と親しくさせ結びつける感情です。あらゆる存在の中で最も愛されるべきは、私達の創造主であられ、私達に命と糧を与えてくださる偉大なアッラーです。預言者ムハンマドは「あなた方に恵みとしての糧を与えられたアッラーを愛しなさい」と述べています。

アッラーへの愛はアッラーだけに従い、宗教上の義務を果たすことを心がけ、アッラーのご満悦やお慶び、近しさを求めることで表現されます。すなわち、アッラーへの愛とはアッラーを信じ、よく従い、誠実に行動し、献身的で忍耐強くあり、クルアーンの示す徳を身につけ、

です。クルアーンには、『言ってやるがいい。「あなたがたがもしアッラーを敬愛するならば、わたしに従え。そうすればアッラーもあなたがたを愛でられ、あなたがたの罪を赦される。アッラーは寛容にして慈悲深くあられる」』（第3章第31節）という啓示が記されています。

崇高なるアッラーは、ご自身を愛する人々について次のように述べておられます。

『信仰する者よ、もしあなたがたの中から教えに背き去る者があれば、やがてアッラーは、民を愛でられ、かれらも主を敬愛するような他の民を連れてこられるであろう。かれらは信者に対しては謙虚であるが、不信心者に対しては意志堅固で力強く、アッラーの道のために奮闘努力し、非難者の悪口を決して恐れない。これは、アッラーが御好みになられた者に与えられる恩恵である。アッラーは厚施にして全知であられる』（第5章第54節）

アッラーを愛する人のもう一つの特徴は、アッラーが創造されたものをアッラーゆえに愛することです。つまり、完全な信者の顕著な特質は、愛情も憎悪も根本的にアッラーのご満悦を

あなたは見ないのか、天にあり地にあるすべてのもの、太陽も月も、
群星も山々も、木々も獣類も、また人間の多くの者が、
アッラーにサジダ（叩頭）するのを見ないのか。
だが多くは懲罰を受けるのが当然の者たちである。
またアッラーが見下げられた者を、誰も尊敬することはできない。
本当にアッラーはお望みのことを行われる。
《聖クルアーン第22章第18節》

獲得するために示す、という点にあります。預言者ムハンマドは、「誰であれ、アッラーゆえに愛し、アッラーゆえに怒り、アッラーゆえに与え、アッラーゆえに拒むのであれば、その人の信仰は完成されたのだ」、「最も徳のある行動は、アッラーゆえに愛し、アッラーゆえに怒ることである」と述べています。

I　善行、罪、悔悟

イスラームの信条から、宗教上の命令、禁止事項に適った行いをする信者に対し、アッラーから報酬が与えられます。アッラーの報酬を獲得させる行いを「善行」と呼びます。命令や禁止事項に従わない行いは、罪と呼ばれます。アッラー以外に神がいるとみなすことや、アッラーの教えを憎悪することは大きな罪です。預言者ムハンマドは罪について、「人の良心を傷つけたり、人を不安にすること、また他人には知られたくないような行い」と述べています。

人が善も悪も行う能力を持って創造されたことついて、クルアーンでは次のように記されています。『魂と、それを釣合い秩序付けた御方において、邪悪と信心について、それ（魂）に示唆した御方において（誓う）。本当にそれ（魂）を清める者は成功し、それを汚す者は滅びる』（第91章第7節～10節）

イスラームの信条によると、すべての人は罪のない状態で生まれてきます。そして、知性を働かせることができるようになると宗教上の責任を負うようになり、それ以降、行いに応じて善行や罪を重ねていきます。人が多神教を信じたり、イスラームに対して憎悪を抱くような罪を犯さない限りは、イスラームの範疇から逸脱しているとはみなされません。信仰する人はもちろん罪を避けるための努力を怠ってはいけませんが、人には罪を犯す可能性があります。重要なことは何度も罪を犯さないよう、悔悟することです。預言者ムハンマドは「すべての人は過ちを犯す。過ちを犯した人のうち最も尊いのは、悔い改める人である」と述べています。

崇高なるアッラーは人々が罪から救われる道として、悔悟という扉を広く開かれておられます。悔悟とは人が自らの罪を後悔し、その罪をもたらした悪い行いを放棄し、アッラーへと向かいお許しを願うことです。つまり悔悟とは、しもべを多神教への信仰やイスラームに対する憎悪から真の信仰へ、アッラーへの反抗から帰依へ、罪から善行へ、過ちから正

人の罪がどれほど大きくどれほど多くても、その罪の程度に
ふさわしい悔悟を行えば、アッラーはお許しくださいます

しい行為へと方向づけるものなのです。

ムスリム（イスラーム教徒）が罪を悔悟することは宗教上の義務です。この義務は一生、続きます。悔悟するのに何の媒介も必要なく、特定された時間や場所もありません。人は時間を失わないうちに、つまり死と直面しないうちに罪を悔悟しなければなりません。なぜなら、死の寸前に行なわれる悔悟は宗教上有効とはみなされないからです。

人の罪がどれほど大きくどれほど多くても、その罪の程度にふさわしい悔悟を行えば、アッラーはお許しくださいます。なぜなら、アッラーは悔悟を聞き入れられ、多くを許されるたいへん慈悲深いお方だからです。それゆえ、アッラーの慈悲を得る望みを絶ってはいけません。崇高なるアッラーはこの点について次のように仰せられています。

『自分の魂に背いて過ちを犯したわがしもべたちに言え、「それでもアッラーの慈悲に対して絶望してはならない」。アッラーは、本当にすべての罪を赦される。かれは寛容にして慈悲深くあられる』（第39章第53節）

またクルアーンには、アッラーは悔悟するしもべたちをお慶びになられ、愛されることが伝えられています。『だがあ

なたがたが、禁じられた大罪を避けるならば、われはあなたがたの罪過を消滅させ、栄誉ある門に入らせるであろう』

（第4章第31節）

第二部　イバーダート（崇拝行為）

A　イバーダートの理解

イバーダート（崇拝行為）とは、ムスリムが主への敬意を明らかにするために行わなければならない義務であり、そしてその実践は善行となる、アッラーへの近づきを示すことを自覚した服従、という意味です。イバーダートはアッラーに敬意を表し、しもべとして従う最も重要な行為なのです。

クルアーンに見られるイバーダートの概念には、アッラーの存在と唯一性を証言すること、啓典と預言者達を正当とみなすこと、アッラーがお慶びくださることを行うこと、アッラーのご判断を受け入れること、アッラーの恵みに感謝すること、災難に耐え忍ぶこと、人の権利を尊重し、人々に慈悲深く振舞うこと、信仰、徳、サラート（礼拝）、ハッジ（巡礼）、ザカート（喜捨）、サウム（断食）、ジハード（アッラーの道に奮闘努力すること）、離婚、ハラール（勧められていること）とハラーム（禁止されていること）、遺産、取引、恩義、孤児、代償などのイスラームの定める命令や禁止事項を守ることとなどのすべてが含まれています。

一つの行為がイバーダートとして成立するためには、その人が信仰心と意志、そしてアッラーへの誠実さを持ち、その行為がイスラームに則った仕方で行なわれることが必要です。

クルアーンでは、アッラーは人をイバーダートのために創造され、預言者達は人をアッラーへのイバーダートへと導いてきたことが明示されています。そして、イバーダートはアッラーに対する忠誠心とともに、決して何ものをもアッラーに配することなく、アッラーに対してのみ行われることが求められています。イバーダートという義務が果たされると、アッラーの恵みに対する感謝の義務も果たされ、さらにアッラーの愛情も手にすることになるのです。

クルアーンで言及されているイバーダートの概念は、広義にはアッラーへの服従を表明するという意味から人生全般を包括するものですが、狭義にはそれぞれの義務の条件に応じた形で実践されるべき一定の崇拝行為という意味になります。

イスラームを成り立たせる条件の一つであるこのイバーダートは、ハディース（預言者ムハンマドの言行録）で次のように説明され、理解を容易にしています。「イスラームは、五つの基本の上に構築されている。すなわち、アッラーの他に神はなく、ムハンマドはそのしもべであり使者であると信じること、サラート（礼拝）・ザカート（喜捨）・ハッジ（巡礼）・ラマダーン月のサウム（断食）を行うという五つの勤行である」。

B　イバーダートの英知

イバーダート（崇拝行為）はその本質と目的から、しもべが崇高なる創造主の存在を知り、その素晴らしいお力の前に自らの無力さを認識すること、無限の時間と果てしない被造物の世界の中に在る自らの立場を知り、それに適った態度をとること、それに適した心のあり方の中で創造主とのつながりを持つという意味になります。

この世の生活を、譬話でかれらに説きなさい。
それはわれが天から降らす雨のようなもので、
大地の草木はそれを受けて茂るが、
（そのうち）風に吹き散らされて乾いた株の根となる。
アッラーはすべてのことに力を持っておられる。
《聖クルアーン第18章第45節》

サラート（礼拝）のために集う人びと。精神的な穢れが清められ、徳の欠如が克服されることによって、調和と均衡の取れた、そして安らぎに満ちた精神活動を送ることができるようになるという点においても、イバーダート（崇拝行為）は最良の手段です

アッラーを差し置いて
他の主人を取る者を
譬えれば、（自分で自分の）家を造る
蜘蛛のようなものである。
本当に家の中で最も弱いのは、
蜘蛛の家である。
かれらに分かっていたならば、
よかったのに。
《聖クルアーン第29章第41節》

またその結果として、イバーダートは個人の幸福や自己の理解、自然界や社会との共存、それに付随して社会の安寧、平和の維持、社会の相互扶助などを実現する手立てとなります。

イバーダート（崇拝行為）はアッラーの命令であるがゆえに、アッラーが命じられ、預言者達が教えた通りに行われます。イバーダートには英知が秘められており、それを実践すると精神的にも肉体的にも効用があります。しかし、イバーダートは一定の効用があるという理由からではなく、ただアッラーのご満悦を得るために行われるものです。

ただアッラーのご命令に従い、アッラーの愛を得るために行われるイバーダートは、信者をアッラーへと近づける最大の媒介であり、人を苦難から守る最も強固な避難所です。アッラー以外の存在に対しては、イバーダートは行われません。信者はイバーダートのおかげで肉体的な欲望から解放され、人格を向上させます。またイバーダートは、信者から内面の良くない考えや、外に表れる良くない行動を取り除き、信者の品性を高めます。そのようにして信者は、アッラーの愛されるしもべとなるのです。アッラーは、『人びとよ。あなたがた、またあなたがた以前の者を創られた主に仕えなさい。恐らくあなたがたは（悪魔に対し）その身を守るであろう』（第2章第21節）と仰せられています。精神的な穢れが清められ、徳の欠如が克服されることによって、調和と均衡の取れた、そして安らぎに満ちた精神活動を送ることができるようになるという点においても、

イバーダートは最良の手段なのです。

その中でもサラート（礼拝）はイスラームで最も重要なイバーダートであり、崇高なる創造主へと近づくための道、すなわちアッラーの御前へと高められるためのステップです。ムスリム（イスラーム教徒）はサラートにおいてアッラーの御前に在り、アッラーと対話するという精神的な喜びを得ます。この世界の煩雑さから遠ざかり、魂を向上させます。サラートは精神的かつ肉体的な清潔さを人にもたらします。なぜならサラートを行うには、そのための場所や衣服、体が清潔でなければならず、その上ウドゥー（礼拝に先立ち行う浄めのこと）もしくはグスル（全身を浄めること）が行われなければならないからです。さらに重要なことは、サラートによって罪が清められることです。預言者ムハンマドは日に五回のサラートを門の前を流れるせせらぎにたとえ、サラートを行えばそのせせらぎで日に五回清められることになると言っています。

サラートは人の心に責任感を与え、心を清め、あらゆる悪い感情や考えを取り除きます。そして行動を制御し、悪を行うことを防ぎます。このことはクルアーンで次のように言及されています。

『あなたに啓示された啓典を読誦し、サラートの務めを守れ。本当にサラートは、（人を）醜行と悪事から遠ざける』（第29章第45節）

さらに、サラートを定められた時間帯に行なうことは、人を計画に基づいた規則正しい生活へと導きます。また、クルアーンでは次のように、サラートが力ある主に助けを求める意義を持つことを示しています。

『あなたがた信仰する者よ、忍耐とサラートによって助けを求めなさい。本当にアッラーは耐え忍ぶ者と共におられる』（第2第１５３節）

サラートの中でも特に勧められているのが、集団礼拝です。なぜならサラートが集団で行われることによって、雇用者も被雇用者も、金持ちも貧しき者も、大きい者も小さい者も、強い者も弱い者も、あらゆる立場の人々が一列に並び肩を並べることになるからです。サラートのおかげで共に肩を並べた人々の間には、相互扶助の感情や友情が生まれます。信者達には、金曜日には仕事を休み、モスクでより多くの人たちと集団を形成し、一斉にイバーダートを行うように命じられています。イード（宗教的なお祭り）の礼拝においては、さらに多数の人々が集います。このように、集団でサラートが行なわれるモスクや礼拝所は、ムスリムたちの社会的な結束や親交の場となります。集団礼拝を行う人々の間にできる

精神的なつながりは、物質的な相互扶助を可能とする環境を整えるものとなります。モスクへ来ることができなかったムスリムを人々が連絡を取り訪ね、健康かどうかを確かめることは集団礼拝で形成された結束を示すものです。

サウム（断食）のイバーダート（崇拝行為）は、我欲を抑制することを通して意志を強固にし、これによって悪い習慣に打ち勝つ力を高めます。クルアーンでは、『信仰する者よ、あなたがた以前の者に定められたようにあなたがたに斎戒が定められた。恐らくあなたがたは主を畏れるであろう』（第２章第１８３節）とあります。

人は物質的な快楽や性欲の虜になると、アッラーの権限を尊重しなくなり、自らを困難に陥れ、他の人の権利に配慮しなくなり他人も困難に陥れることとなります。サウムは、そうしたことを引き起こす「我欲の虜となった状態」を解消させます。そして、精神を悪い習慣から解放し、愛情やいたわり、慈しみの感情を深める契機となります。サウムはまた、貧しき者の状態をよりよく理解し、彼らの苦痛を軽減させるために努力するように導きます。「満腹している人は、空腹の人の状態が理解できない」ということわざは、サウムの意義を示唆するものです。サウムは人が社会の中でより信頼の置ける寛容な存在であるよう促しているのです。預言者ムハンマドも、「サウムは後ろ盾である。断食している時は

もし、その（天地の）間にアッラー以外の
神々があったならば、それらはきっと混乱したであろう。
それで玉座の主、
かれらが唱えるものの上に（高くいます）
アッラーを讃えなさい。
《聖クルアーン第21章第22節》

決して、品のない悪い言葉を発してはいけない。誰かがあなたに喧嘩を仕かけてきても、私は断食中だと言いなさい」と述べています。

預言者ムハンマドの「断食しなさい、そうすれば健康を見出すであろう」というハディース（預言者ムハンマドの言行録）は、サウムが人の健康にも有効であることを明らかにしています。これは医学的にも認められていることです。

ザカート（喜捨）は、裕福な人が富の一部を、それを必要とする境遇にある人々に与える行為で、人を物惜しみや自己中心的といった悪癖から救い、社会が健全に発展していくことに寄与します。ザカートはクルアーンで次のように説明されています。

『かれらの財産から施しを受け取らせるのは、あなたが、かれらをそれで清めて罪滅しをさせ、またかれらのために祈るためである』（第９第１０３節）

つまりザカートは、財産に対する人の執着を抑え、個人の間の愛情や敬意を増し、より均衡の取れた富の分配を促し、それによって経済的な格差から生じ得る敵意を未然に防ぐものです。そして、社会の安寧や秩序を維持する上で大きな役割を果たしています。ザカートは貧しき者、頼れる人がいない者、孤児、道中で困っていたり、借金がある者といったような助けを必要としているあらゆる人々を対象としており、社会の安定を図る上で重要な役割を担っています。

あらゆる階層の人々が皆、同じ衣装を身にまといマッカへハッジ（巡礼）するイバーダートは、アッラーに集められ、裁かれる日を思い起こさせるものです。巡礼はアッラーの御前においてはすべての人が平等であり、この世での生が一時的なものであること、そして人の権利を尊重しなければならず、また財産、富、地位といったものが人を高めるものではないということを教えています。信者は巡礼によって誠実にアッラーに向かい、悔悟が受け入れられ、罪が許されるのです。聖地マッカを目の当たりにすることも、人に精神的な喜びを与え、宗教的な感情を強めます。世界各地から、皮膚の色や言葉がさまざまに異なる人々が同じ目的を持って集う巡礼は、人々が出会い、連帯感や兄弟愛といった感情を育み、諸問題を解決する機会ともなります。こうしたことから巡礼は、多くの民族の間の会議といった要素も持っているのです。

イスラーム社会の特徴を表しているとみなされているイバーダートの一つである供犠（神に犠牲を捧げること）には、アッラーや人々への献身という意味がこめられています。供犠は何世紀にもわたって、宗教生活上の重要な位置を占めてきました。これは、ムスリム（イスラーム教徒）は必要となればすべての財産をアッラーの道のために捧げることができ

る、ということの証です。また供犠は、人が自分の欲望や低俗な感情を押し留める、ということを象徴する行為でもあります。神からの啓示による宗教として最後にもたらされたイスラームは、人々に人間らしい徳をもたらすと同時に、社会や集団を一体化させ、一つにさせるいくつもの命令や規則を有しています。イスラームのこの優れた特性は、ザカート（喜捨）・ハッジ（巡礼）・供犠といった社会とかかわり財産を用いて行なわれるイバーダート（崇拝行為）において、よりはっきりと示されています。これらのイバーダートは、何世紀もの間すべてのムスリムの社会で、根本的な基本原則として本質を変えることなく続けられ、伝えられてきました。

C　預言者ムハンマドのイバーダート

他のあらゆることと同様に、イバーダート（崇拝行為）においてもウンマ（イスラーム共同体）の模範であった預言者ムハンマドは、イバーダートでアッラーのしもべであることを明確に自覚することに重きを置き、信仰の意味と喜びはイバーダートや善い行いによってのみ手にすることができると示しています。なぜなら社会生活に関心を持つことは、アッラーに対する責任感とも表現できるものだからです。常にアッラーへのイバーダートに勤しんだ預言者ムハンマドは、生涯を通して決してイバーダートを放棄することなく続け、「最も尊いイバーダートとは、たとえ少しずつであっても、継続して行なわれるものである」と述べています。

預言者ムハンマドはイバーダートを非常に大切に考えていましたが、ウンマがイバーダートを過度に行うことは良しとしませんでした。預言者ムハンマドのイバーダートに対する考えを知った三人の教友が、預言者ムハンマドは過去と未来のあらゆる罪が許されているのにもかかわらず、なぜそれほどまでにイバーダートを励行しているかを考えた末に、一人は生涯を通して夜も眠らずにサラート（礼拝）をし、他の一人は生涯サウム（断食）を続け、三人目は一生結婚しないと心に決めていました。このことを聞いた預言者ムハンマドは、「アッラーに誓って言うが、アッラーを最も畏れる者、禁じられたことから最も遠ざかっている者は私である。そんな私でも時にサウムをし、時にはしない。夜にはサラートをすることもあれば、眠ることもある。それに私は結婚している。これらが私のスンナ（預言者の言行）である。スンナを気

預言者ムハンマドは、イバーダートの中で夜の崇拝行為も大事にしていました

に入らない者は、私の仲間ではない」といさめたのでした。

預言者ムハンマドがイバーダートにおいて重視し、またウンマにも推奨された原則の一つが、容易さです。したがって預言者ムハンマドは、人が努力してなんとかイバーダートを行おうとして困難に陥ることは認めませんでした。預言者ムハンマドはイバーダートのみならずあらゆることを、宗教上の原則を保持するという条件の下で無理せず行うよう信者達に勧められたのです。

預言者ムハンマドは、イスラームの教えの柱と位置づけたサラートのイバーダートを非常に重く見、それを〝目の光〟（心をいやすもの）と呼びました。クルアーンの命ずるところに従い、謙虚さと畏怖のうちにサラートを行った預言者ムハンマドは、サラートの際はあたかもこの世に別れを告げ、あの世に行ってしまっているかのようでした。そもそもイバーダートは、アッラーとお会いするかのように行われるべきものなのです。

天使ガブリエルはハディース（預言者ムハンマドの言行録）で、アッラーの恩恵を「私達はアッラーを見ることができなくても、アッラーは私達をご覧になっておられるのだ」と説明しています。

日に五回行う義務であるサラートに加え、さまざまな時にナーフィラ（義務でない）のサラートも行っていた預言者ムハンマドは、なかでも夜のイバーダートを大事にしていました。特にサウムの月であるラマダーン月（イスラーム暦の九月）の夜を有意義に過ごし、その月の最後の十日間、礼拝所にこもってイバーダートを行いました。詠まれたクルアーンの章句に秘められた深い意味について熟考し、サラートの後には短く意義のあるドゥアー（祈り）を捧げました。クルアーンを詠むこと、また他の者が詠むクルアーンを聞くことをとても愛した預言者ムハンマドは、ラマダーン月には天使ガブリエルと会い、ともにクルアーンを読誦しました。

サウムに関して預言者ムハンマドは、イフタール（断食明けの食事）は急いでとり、サフル（断食前の軽食）はイムサ

ーク（日の出よりいくらか前に設定されている断食開始の時刻）までに終えていることを推奨され、またサフルの食事には特別の恵みがあることを明らかにしています。預言者ムハンマドはラマダーン月（イスラーム暦の九月）のサウムと並んで、特定の時期には義務でないサウムも行いました。すなわち、毎月の真ん中にあたる日、月曜日及び木曜日、ムハッラム月（同一月）の九日目と十日目、あるいは十日目と十一日目、シャッウワール月（同十月）には六日間断食することを信者たちにも推奨しています。また、ラジャブ月（同七月）とシャーバーン月（同八月）にはより多くサウムを行ったことがハディースに記されています。

預言者ムハンマドは必要以上の財産を所有せず、蓄えができた時はそれを隣人や必要としている人々に与えていました。最も気前のよい人とされる預言者ムハンマドは人々にザカート（喜捨）を施すだけでなく、それ以外にも必要としている人々に経済的な援助を行っていました。ザカートができるだけ早く必要としている人にもたらされるように、集まったザカートをできる限り早く分配しました。

すべてについてムスリム（イスラーム教徒）の模範である預言者ムハンマドは、もちろんイバーダート（崇拝行為）を遂行することにおいても最高の模範でした。ムスリムは各自その能力に応じ、彼を模範として自らのイバーダートのあり方を検討する必要があります。また、神の慈悲に対しては希望を、神の罰に対しては畏れを抱いて生きるべきムスリムとして、自らの行っているイバーダートを不十分だとみなし失望することは正しくありませんが、自らのイバーダートが十分だとみなすこともまた、正しいことではありません。

D　さまざまなイバーダートとそのあり方

宗教上の命令に対して責任を負うムスリム（イスラーム教徒）には、生涯を通して行わなければならないイバーダート（崇拝行為）と、一生に一度行えば十分であるイバーダートがあります。前者のうち毎日行わなければならないのは日に五回のサラート（礼拝）で、週に一度行われるのが金曜日の集団礼拝です。毎年繰り返されるイバーダートにはザカート（喜捨）、ラマダーン月（イスラーム暦の九月）のサウム（断食）、年に二回のイード（宗教的なお祭り）のサラート、そ

して犠牲祭での供犠があります。ハッジ（巡礼）は一生に一度行うことで義務を果たせます。

これらの他、時期が定められていないものとして、葬儀のサラート、願をかけた後の供犠、ナーフィラ（義務ではない）のサラート、サダカ（施し）を行うこと、そしてドゥアー（祈り）、ズィクル（唱念）といったイバーダートがあげられます。それぞれのイバーダートには固有の条件と仕方があります。

1　清潔さとイバーダート

イスラームの教えは、精神的・物質的両面における清潔さを、重要視しています。一般的な意味での清潔さであれ、イバーダート（崇拝行為）のための清潔さであれ、清潔さに関するいくつかの原則がイスラームには存在します。これはイスラームの教えが人の生き方を精神・物質の両面からとらえていることを示しています。なぜなら、魂が高められることや人が精神的に良い状態であること、精神的な穢れが清められることは、アッラーを知り、アッラーにイバーダートを行い、従うことと深いつながりがあるのと同様に、人の周囲の物理的な条件もイバーダートに適したものである必要があるからです。この意味で、体や周囲の清潔さとイバーダートを行なう生活や、精神的に清められることとの間には深い結びつきがあります。なぜなら、クルアーンで清潔さについて言及される時には、精神的・物質的両面から表現されているからです。

イスラーム文化においては、一般的な意味での清潔さとイバーダートのための清潔さは相互に補完しあうものであり、

幽玄界の鍵はかれの御許にあり、
かれの他には誰もこれを知らない。
かれは陸と海にあるすべてのものを
知っておられる。
一枚の木の葉でも、かれがそれを知らずに
落ちることはなく、
また大地の暗闇の中の一粒の穀物でも、
生気があるのか、また枯れているのか、
明瞭な天の書の中にないものはないのである。
《聖クルアーン第6章第59節》

イスラーム学者達は清潔さを物質的清潔さ、法的清潔さ、精神的清潔さの三つに分類しています。物質的な清潔さとは、身体や衣服、周囲の環境の清潔さなどのことです。これらは一般的にイバーダート（崇拝行為）の準備や条件として、そしていくつかの条件はそれ自体がイバーダートとして位置づけられています。法的な清潔さとは礼拝の条件、さらにはいくつかの他のイバーダートの条件でもあるウドゥー（礼拝に先立つ浄めのこと）やグスル（全身を浄めること）のことを指しています。精神的清潔さとは、人の陰口を言わない・嘘をつかない・禁じられているものを食べないといったこと、さらに妬みやうぬぼれ、見せかけや欲望といった感情を持たないということです。

クルアーンでは、『あなたがたはこれをタワーフ（回巡）し、イアテカーフ（御籠り）し、またルクーウ（立礼）し、サジダ（叩頭）する者たちのために、わが家を清めなさい』（第2章第125節）と命じられ、イバーダートを行う場所を清潔に保つことを求めています。他の章では、『アッラーは、その身を清める者を愛でられる』（第9章第108節）とあり、アッラーの愛情を得るためには、清潔でなければならないことが示されています。預言者ムハンマドも、「清潔さは信仰の半分である」「アッラーは清らかであられ、清らかさを愛される」と述べ、

サラート（礼拝）はイスラームの五つの勤行のうちの一つであり、特別重要なイバーダート（崇拝行為）です

また他の言い方で周囲の環境や身体、そしてイバーダートの場所を清潔に保つように勧められ、自ら率先して教友達をはじめすべてのムスリム（イスラーム教徒）の模範となりました。

2　サラート（礼拝）

サラートはイスラームの五つの勤行のうちの一つであり、定められた動作や言葉、クルアーンの章句を唱えることから構成されています。サラートはズィクル（唱念）、アッラーを讃えること、ドゥアー（祈り）、起立、ルクーウ（立礼）、サジダ（叩頭）することという六つの崇拝行為を含む、特別に重要なイバーダート（崇拝行為）です。

サラートは義務のサラートと義務ではないが行った方がよいと強く勧められるサラートの二つに分類され、義務のサラートとは一日に五回のサラート及び金曜の集団礼拝のことです。毎日の義務のサラートは、ファジュル（早朝）に2ラカート（礼拝の単位）、ズフル（昼）に4、アスル（午後）に4、マグリブ（日没）に3、イシャー（夜）に4の計17ラカートになります。金曜日の昼に行なわれる金曜礼拝は、集団で行なわれ2ラカートです。

その他に信者が亡くなったときや宗教的なお祭りのときに行うサラートもあります。

3　サウム（断食）

サウムは、地平線が白み始める夜明け前から日没までいっさい飲食せず、さらに性的接触からも遠ざかるイバーダートです。

成熟し知性を備えたムスリムが、ラマダーン月（イスラーム暦の九月）にサウムをすることは義務です。ただし、サウムができないほどの病気にかかっていたり、旅をしている人は免除されます。病人が回復し、旅人が家に戻った時には、できなかった日数分のサウムを行います。病人に回復の見込みがなけれ

イフタールの時刻とは一日の断食が終了する、太陽が沈む時刻のことです

ば、できなかった日数分のサウム（断食）を行う代わりに貧しい人々にその日数分の食事代に相当する代金を施す必要があります。月経中や出産後の女性はサウムをせず、後に代わりのサウムを行います。

4　ザカート（喜捨）

財産にかかわるイバーダートであるザカートは、イスラームの五行の一つで、クルアーンには次のように記されています。『サラート（礼拝）の務めを守り、定めのザカート（喜捨）をなし、ルクーウ（立礼）に勤しむ人たちと共に立礼しなさい』（第2章第43節）

ハッジ（巡礼）のためにイスラームの聖地マッカに集う人びと。写真中央はカアバ神殿

ムスリム（イスラーム教徒）がザカート（喜捨）の義務を遂行するためには、その人が成熟し知性を備え、奴隷ではなく自由の身であり、借金や基本的な出費以外に一定の基準に達する財産を持っていることが条件となります。この基準はザカートやサダカ（施し）、供犠といったイバーダート（崇拝行為）に関して定められている、最低限の豊かさの基準となるものです。さらに、この基準に達した財産を持つ人がザカートの義務を負うためには、その財産が持ち主に利益や効果をもたらす状況にあり、それを得てから一年が経過していることが必要です。

クルアーンではザカートとして支払われる財産として金、銀、穀物、果物、商業などで得られた利益、鉱物やその他の地下資源などがあげられています。一般的に、財産の四十分の一がザカートにあてられます。ただし農産物に関しては、それにかかった費用に応じ二十分の一もしくは十分の一となります。動物に関しては、その種類に応じて定められています。

ザカートは、クルアーンの第9章第60節で述べられているように、『貧者、困窮者、これ（施しの事務）を管理する者、および心が（真理に）傾いてきた者のため、また身代金や負債の救済のため、またアッラーの道のため（に率先して努力する者）、また旅人のため』のものです。ザカートは自分の父母、祖父母、子供、孫、さらにイスラーム教徒でない人や富裕層の人々には与えることができません。

5　ハッジ（巡礼）

ハッジとはマッカにあるカアバ神殿とその周辺の聖地を、定められた時に定められた形で訪れ、必要な巡礼の義務を果たすことで、クルアーンには次のように記されています。

『この家への巡礼は、そこに赴ける人びとに課せられたアッラーへの義務である』（第3章第97節）

預言者ムハンマドもハッジがイスラームの五行の一つであり、重要で有益なものであると明言し、同時にその方法も示しています。健康と経済の両面から見てハッジが可能であり、成熟し知性を備えたムスリムにとって、生涯に一度ハッジを行うことは義務です。ハッジを行う条件が整った人は、先延ばしにすることなく速やかにこの義務を遂行しなければなりません。一度ハッジを行ったムスリムは、その後は巡礼をする必要はありません。

6　供犠

供犠のイバーダート（崇拝行為）は、一定の条件を備えた動物を定められた方法で屠り、アッラーに捧げることであり、成熟し知性を備えた生活に余裕があるムスリムが行うべき、イバーダートです。基本的な生活費や借金よりも、20ミスカル（80・10グラム）の金あるいはそれに相当するお金や資産を持っている人が、生活に余裕があると定義されています。つまり、アッラーが自分に与えてくださった恵みへの感謝の表明と、アッラーの道を進んでいく証として犠牲を捧げるのです。

捧げられる動物は羊、山羊、牛、水牛、ラクダと定められています。動物は乳歯が生え変わっていなければならず、ラクダなら五歳、牛や水牛は二歳、羊や山羊の場合は一歳を過ぎていることがその目安です。捧げられる動物は、苦痛を味わわせないように熟練している人の手によって速やかに屠られなければなりません。さらに周囲の環境を汚さないように十分留意する必要があります。動物を屠る際には、精神的な影響を与えないよう子供達をその場から遠ざけ、また他の動物への影響も考慮しなければなりません。

供犠のイバーダート（崇拝行為）は一定の条件を備えた動物を、定められた方法で屠りアッラーに捧げることであり、成熟し知性を備えた宗教上豊かであると定義された財産を持っているムスリム（イスラーム教徒）が行うべき、イバーダートです

7　願をかける行為

願をかける行為とは、人が願っていることをかなえたり、恐れていることから逃れられるように、アッラーのご援助を得る目的であるイバーダート（崇拝行為）を行うとアッラーに誓い、行うことです。こうした行為はほとんどすべての宗教で見られるものです。

願をかける行為が宗教上有効と認められるためには、それを行う人が成熟し知性を備えたムスリム（イスラーム教徒）であることが前提です。さらに、願いの内容が現実的に可能なものであり、宗教上認められるものであること、そして願かけの行為が礼拝・断食・巡礼・供犠・施しといった義務のイバーダート（崇拝行為）でなければなりません。墓でろうそくを灯す、布を巻く、雄鶏を捧げる、砂糖やお菓子を配るというような行為は有効ではありません。

第三部　イスラームと社会生活

A　社会の結びつきと周囲に対する義務

宗教としてのイスラームの根本的な目的は、人々がこの世で安らぎと信頼、幸福のうちに生き、あの世においても永遠の幸福に至ることです。イスラームには人が真の意味で安らぎと幸福を手にするために必要とされる、アッラーや他の人々、周囲との関係を整える原則が存在します。家族に対する振舞いから親戚、隣人、友達、親友、その他の人々とのかかわり、仕事における社会的・集団的な義務と責任に至るまで、生活のあらゆる場面において宗教上の命令や禁止事項、推奨に従うことは、ムスリム（イスラーム教徒）としてしなければならない最も重要なことです。たとえイバーダート（崇拝行為）を実践しているとしても、社会において不正を働いたり公正に振舞っていない人は、完成されたムスリムとはいえません。

クルアーンでは信仰について述べられているところでは必ず、社会との良好な関係を含む「社会的善行」についても言及されています。これはイスラームが社会とのつながりを重視していることを示すものです。預言者ムハンマドのハディース（言行録）においても、多くの善い行いや振舞いは信仰が要求するものとして位置づけられています。イスラームは宗教に対する個人的な熱心さ以上に、社会的な務めや責任といったことにより多くの重要な規則を設けています。「イスラーム的な善いことや責任とは、常に他者のことを考えて助け合い支え合うことであり、悪いことや敵対的な行為とは、守り合わず支え合わないことである」「善や美が広められ、それが社会を支配するようになると、悪事や不正を防ぎ、取り除くことができるようになる。そして、そのようにして徳を伴った社会を形成するために努めること」などが、その例です。

イスラームは人が周囲に対して気を配り、自分よりも相手のことを優先して考えるように促しています。そして、イスラーム的な責任感や他者を優先する精神、奉仕、純誠、誠実さ、忠義、純潔、恥の精神といった多くの徳目を示しています。さらに、周囲の人々に対する無関心、他の人に害を与える要因ともなる自己中心さや物惜しみ、不正に対する看過・鈍感さといったものを禁じています。

B　家庭

社会の核である家庭は、最も古くからある社会の基本的な構成単位であり、人類の存続と発展にも大きな役割を担っています。家庭の最も重要な機能は、人々が子々孫々続いてくことができるように支えていくことにあります。これに加え、家庭は生まれてくる子供達が肉体的・精神的・道徳的に均整が取れ健やかに発育していくための礎でもあります。このようにして家庭はあらゆる面から人類の発展を支えています。

家庭は外部の困難な状況から子供を守り、教えを施し道を方向づける最初の場なのです。子供達を社会から期待されている宗教的・法的な規則を尊重する子に育てることは、家庭だけができることです。それゆえ、教育者は家庭を最

アッラーが天から水（雨）を降らせられれば、大地が緑になるのをあなたは見ないのか。本当にアッラーは親切にして知悉される御方である。
《聖クルアーン第22章第63節》

初の、そして最も影響力のある学び舎とみなしているのです。
家庭は宗教上の大切な要素やそれに従った生き方を守り、民族の存在やその文化を継続、発展させ、次の世代へと伝えていく手段のなかで最も重要なものです。子供が精神的・肉体的に健全に生まれ、育ち、人格を磨き道徳を身につけ社会に適応していくことは、家庭の存在なくしてはありえないことです。
また、家庭は人間としての豊かさや幸福、精神的・肉体的健やかさを守るためにも欠かすことはできません。クルアーンにはそのことについて次のように記されています。
『またかれがあなたがた自身から、あなたがたのために配偶を創られたのは、かれの印の一つである。あなたがたはかの女らによって安らぎを得るよう（取り計らわれ）、あなたがたの間に愛と情けの念を植え付けられる。本当にその中には、考え深い者への印がある』（第30章第21節）
このようにクルアーンには結婚と家庭はアッラーが存在する印であると記述されており、これはイスラームが家庭をいかに重要に考えているかを語るものであり、同時に結婚が人の本質に即したものであることも示唆しています。
健全な社会、そして安らぎや健やかさを持つ家庭であるためには、しっかりした土台の上に家庭が築かれる必要があります。家庭が個人や社会、さらには人類のために負っている重要な任務を果たせるかどうかは、家庭が継続的であり、家

クルアーンには結婚と家庭はアッラーが存在する印であると記述されており、
これはイスラームが家庭をいかに重要に考えているかを語るものです

族が協調し、それぞれが役割を果たしているか否かにかかっています。家庭は自らの欲望よりも夫婦間及び親と子の結びつき、家族の幸福を追求することを優先させる献身的な男女が共に過ごす場所であり、安定した幸福や安らぎはこのような家庭によって守られるのです。結婚を単に自らの欲望を満足させる手段とみなすことは、イスラームの信仰に反する考え方です。イスラームでは結婚は安定したものでなければならず、そのためには自らにふさわしい相手を選ぶことを勧めています。

クルアーンは家庭が継続していくために必要な、非常に重要な態度を明示しています。すなわち愛情、敬意、礼儀、寛容、理解、権利の尊重、高潔、恥の意識、忠実さ、恩義、信頼、正しさ、誠実さ、心からの態度、均衡、穏健さといった態度が推奨され、家庭の崩壊へとつながる暴力、衝突、挑発、寛容の欠如、権利の侵害、不誠実さ、貞節の欠如、恥知らずな態度、裏表のある態度といったものは禁じられています。

クルアーンでは男性は女性と協調していくように命じられています。家庭が安らぎを持って継続していくためには、誠実さや心からの振舞いが欠かせません。愛情や寛容さや誠実さが存在しない家庭では、物質的に充足していたとしても、安らぎを得ることがないのです。

預言者ムハンマドは、「信者のうち信仰が心にあふれている者とは、高い品格を持ち、家族に対し最も良く振舞う者のことである」と述べています。

C　親戚や近親者とのつながり

イスラームでは親戚との絆を大切にしています。これに反し親戚との関係を絶つことは大きな罪になります。崇高なるアッラーはクルアーンで、『また近親の絆を（尊重しなさい）』（第4章第1節）『近親者に、当然与えるべきものは与えなさい。また貧者や旅人にも。だが粗末に浪費してはならない』（第17章第26節）と仰せられています。

預言者ムハンマドは親戚としっかりとした絆を保つことは、アッラーとの結びつきを強固なものにすることに通じると教えると同時に、「親戚への愛情は財産を豊かにし、長い寿命をもたらす」とも述べています。別のハディース（預言者

ムハンマドの言行録）には、「目上の人を尊敬せず、目下の人を愛さない者は、私たちの仲間ではない」とありますが、目上の人と言えばまず第一に父母のこと、目下とは子供達のことを指しています。

人にとってアッラーへの信仰とイバーダート（崇拝行為）の次に大事な務めは、父母に対し敬意と愛情を持ち親密な態度で接することです。クルアーンでは、『われは、両親に対し優しくするよう人間に命じた』（第46章第15節）と告げられています。年齢にかかわらず子供達は両親に敬意を持つことを忘れてはならないのです。

長い人生においてさまざまな困難に直面しながらも子供を育て、あらゆる苦難を乗り越えてきた父母は、いかなる観点からでも敬意を払われ、従われるべき存在です。クルアーンでもアッラーへのイバーダートに次いで父母への献身を大切なものとし、子供達は父母に従い物質的・精神的な求めに応えるように命じられています。

子供には両親に対して行うべき多くの務めがあります。すなわち、両親の求めに応えること、両親に安らいだ環境を提供できるように努めること、禁止されていることでなければできるだけ両親の望みを実現させ、両親のイバーダートを助けること、両親のために祈願すること、両親を尊重すること、両親を傷つけるような行動や態度は慎むこと、両親が遺言を遺した場合はそれを実践すること、死後も両親の親友や彼らが愛していた人々との関係を保ち続けることなどが、両親に対する人としての務めなのです。

両親に反抗することは大きな罪とされています。預言者ムハンマドは両親に従い、奉仕すれば天国へ行け、反対に両親に反抗し、敬意を示さなければ地獄へ行ってしまうと教えました。父母がそばにいるのに、彼らに対し天国に行くことができないような態度をとる人達に警告を与えたのです。また「アッラーのご満悦は母や父の喜びと、アッラーのお怒りは母や父の怒りと結びついているものである」というハディース（預言者ムハンマドの言行録）は、来世の幸福を獲得するためには親に従わなければならないことを明白に示すものです。なぜなら子の母や父に対する祈願は、唯一の神アッラーに承認されるものであるからです。

同時に、両親に反抗する人は来世だけではなく、この世においてもその結果が問われます。少なくとも、同じような振舞いを自分も子供から受けることになるでしょう。預言者ムハンマドも、「あなた方の父に対し良く接しなさい。あなた方の子供があなた方に対し良く接するように」と述べています。

子供達を愛しきちんとしつけをすることも、現世と来世双方のための備えとなります。両親は子供達が肉体的にも精神

預言者ムハンマドは親子関係について、「あなた方の子どもがあなた方に対し良く接するように」と述べています

的にも良い形で成長し、人々の役に立つ人間になるように、できる限りのことをすべきです。そのためには、まず自分達が立派な模範となり、アッラーが禁止されていることを子供達に守らせ、彼らの教育に深く関与し、何が善いことであり、何が悪いことであるかを教えていく必要があります。

ただし、目上の者とは単に両親だけを指すものではなく、同様に目下の者とは単に子供だけを指すものではありません。両親に加え、祖父母、兄、姉、叔父、叔母、隣人の年長者達も目上であり、また一般の老人達、教師達もまた目上とみなされる存在です。

崇高なるアッラーはクルアーンで、隣人達に愛情と敬意を持って交わるように命じられています。預言者ムハンマドも、「天使ガブリエルは私に、隣人達とどうのように接すればばいいのか何度も助言してくれました」と述べています。

他のハディースでは、「アッラーと来世を信じる者は、隣人に迷惑をかけてはいけない」とも語っています。また別の場面では、「次のような人は、完成されたムスリムではない」と三度断言するくだりがあり、「それは誰か」と尋ねられた預言者ムハンマドは、「隣人に対して災いをもたらすような人」と答えています。

客に敬意と愛情、親密さを示すこと、客をもてなすことも美徳です。預言者ムハンマドは「アッラーと来世を信じる者は客をもてなしなさい」と勧めています。

D　他人とのかかわり

イスラームは他人との交際においても、誠実さや笑顔、謙虚さ、献身、恩義に対する忠義、正しさを持つように教えています。家族をはじめとして親戚、隣人、そしてそれ以外の人々と、愛情や敬意、信頼に基づいた良い関係を築かなければなりません。預言者ムハンマドは、「良い信者とは、人と良い関係が結べる人である。他者とわかりあえず、うまくつきあえない人には益はもたらされない」と述べています。

預言者ムハンマドは、互いを愛することは信仰の要求するところであるとし、「お互いを愛さない者は、完全な信仰を持ったことにはならない。あなた方があることを実践した時、お互いを愛するようになる。あることというのは、あなた方の間に平安を広めることだ」と言っています。また別のハディース（預言者ムハンマドの言行録）では、愛情を持って他人とかかわることについて次のように語っています。「ムスリム（イスラーム教徒）はお互いを愛し合い、慈しみ合うことによって、あたかも一つの身体のようになる。身体の器官のどこかが不調になれば、それに伴って他の器官も熱を持ち不調となる」。

愛情は他の人の権利を尊重し、その人を傷つけるような言葉や態度を慎む行為として現れます。預言者ムハンマドは、礼拝や断食や施しをよく行なうが、言葉や態度で隣人達を傷つけて

イスラームは他人との交際においても、誠実さや笑顔、謙虚さ、献身、恩義に対する忠義、正しさを持ってつきあうように教えています

いたある女性について言及し、「その女性は地獄に落ちる」と断言したのです。他のハディースでも、「隣人から、あの人は害をもたらさないと信頼されるような人でなければ、天国には入れない」と説明しています。

イスラームはいかなる状況においても、個人や集団の権利を侵すことを禁じています。たとえば、私利私欲のために社会に損害を与えること、うまくできない仕事なのにそれに固執しようとすること、職務を悪用すること、賄賂や利子を受け取ること、闇市を利用すること、集団もしくは個人の動産・不動産を横領すること、取引や交易で計略を企てること、騙すこと、ののしること、暴力を振るうこと、心を傷つけること、中傷したり陰口をたたくこと、人のプライバシーを暴くこと、不当に迫害することなどです。

ムスリムは協調性を備え、誰からもこの人は他人に迷惑や害悪を及ぼさない人だと思われる人間でなければなりません。預言者ムハンマドは、「あなた方のうち最も価値がある人とは、周囲の人達がこの人は善いことを行い悪いことは決して行わないと信頼している人のことである。最も価値がない人とは、この人は悪いことを行うのではないかと不信感を抱かれている人である」と述べています。

人はたとえ不当な扱いをされたとしても、その人に対し良い振舞いで応じるべきです。

私達の先達は次のように言っています。

「善に対し悪を持って応えるのは、災いを及ぼす人の行為。善に対し善を持って応えるのは、皆の行為。悪に対し善で持って応えるのが、勇者の行為」

なぜなら優れた徳とは、奪う者に対しても与えること、関係を絶とうとする者ともかかわりを維持しようとすること、迫害する者を許すことにあるからです。クルアーンでは次のように説かれています。

『善と悪とは同じではない。（人が悪をしかけても）一層善行で悪を追い払え。そうすれば、互いの間に敵意ある者でも、親しい友のようになる』（第41章第34節）

社会的な関係においてイスラームが示している原則に、正義と助け合いの精神があります。クルアーンでは『むしろ正義と篤信のために助けあって、信仰を深めなさい』（第5章第2節）と記されています。預言者ムハンマドも、ムスリム達が助け合い支え合うことを、レンガが互いにしっかりと結びつき、崩壊しないように互いに支え合っている建物にたとえています。

アッラーのお恵みや援助、ご満悦を望む人は、必ず必要としている人に救いの手を差し伸べなければなりません。これは宗教上の務めであると同時に社会的な責任でもあります。クルアーンでも、金持ちの財産には貧者の権利が存在していると明言しています。金持ちが、貧者の必要に応じて施しを与えることは義務なのです。もし貧者が貧窮したままであるなら、アッラーは金持ちの人達にその責任を問われるでしょう。

預言者ムハンマドは「次のような人は、真の信仰を持ったことにはならない」と三度、断言しています。「それは誰でしょうか、アッラーの使徒よ」と人々から尋ねられると、「隣人が空腹でいるときに、満腹して眠る人である」と答えています。

ムスリム（イスラーム教徒）が互いに責任を負い助け合っている形の一つが、「貸す」という行為です。宗教上、お金を貸すことはアッラーをご満悦に至らせる行為として認められています。なぜなら、これは人が必要としていることに応じることであり、その人の物質的な苦しみを和らげるものであるからです。したがって預言者ムハンマドは、お金を貸すことをサダカ（施し）よりもなお徳のあることとしています。アッラーのご満悦を得るために人にお金を貸すことは、アッラーに何かをお貸しするようなものとみなされ、その見返りは何倍にもなって与えられるとクルアーンでは述べられています。

社会的な関係においてイスラームが示している原則に、
正義と助け合いの精神があります

助け合いとは単に必要としている人にお金や物を貸すという行為だけではありません。人が悪い道に入らないように方策を講じることも、その人を助けることになります。預言者ムハンマドは、「乱暴者であっても、虐げられる者であっても、あなたの兄弟を助けなさい」と述べています。これに対して人々から「アッラーの使徒よ、虐げられた者を助けるの

はわかります。乱暴する者を助けるとはどのようなことでしょうか」と尋ねられると、「彼からその残虐行為を取り除くことができれば、それも彼を助けることになるのです」と答えています。

預言者ムハンマドは人々に社会的な責任を果たすため、船に乗り合わせた人々を例に挙げて話をしています。この船には上の階と下の階に人が乗り、下の階にいる人が水が必要になって船に穴を開けようとします。その時、上の階に乗っている人がそれを止めさせなければ、船は沈み、皆がおぼれてしまいます。もし止めさせることができれば、皆が救われるのです。

E　女性

イスラームは女性と男性は平等であり、互いに補い合う存在だと説いています。男性と女性の間には本来、宗教上の責任や法的な能力、権利や自由といった観点からも基本的に差異はありません。双方とも等しくアッラーの命令と禁止事項のもとにいるのです。男性であれ女性であれ、すべての人はともにアッラーのしもべとして振舞う責任を負っているのです。

女性にいっさいの権利が認められず、女の子を産むことが恥ずべきこととみなされ、生後生き埋めにされることもあった時代に、イスラームはその活動の当初から女性も男性と同等の存在として認め、性による差別を行いませんでした。

クルアーンでは、『男でも女でも、あなたがたは互いに同士である』（第３章第１９５節）、『男の信者も女の信者も、互いに仲間である』（第９章第71節）、『かの女らはあなたがたの衣であり、あなたがたはまたかの女らの衣である』（第２章第１８７節）といった表現で、女性と男性は同等であり、お互いが補い合う存在であることを示しています。また、他の章句でも女性と男性を問わず、信仰し良い振舞いをする者が称賛されると告げています。

クルアーンの第58章では、ムスリム（イスラーム教徒）の女性が時の政権に対し、自らの権利を守るために努力したことが記されています。また他の章では、預言者ムハンマドが女性から誓約をとられたことにも言及しています。このようにイスラームでは、女性という存在は何かに隷属するものではないことを明示しています。したがって、女性であるとい

イスラームでは法的には、女性は家の中でも外でも働くことができ、
家族が必要とするものを確保するために夫を助けることができます

うことによって権利や行動が制限されるべきではありません。女性の持っている権利が夫や隣人によって侵害された場合には、女性は法に訴えて不正を取り除く権利を持っているのです。

イスラームでは法的には、女性は家の中でも外でも働くことができ、家族が必要とするものを確保するために夫を助けることができます。また条件によっては、夫婦の役割分担を変更することも可能です。重要なことは、人々が安定と秩序の中で毎日を過ごし、必要なものを手にするためにも、それぞれの能力や才能に応じ責任を分かち合うことです。いくつかの文献には、預言者ムハンマドの家の中の仕事は娘のファーティマ（預言者ムハンマドの娘）に、外回りの仕事は娘婿のアリーに任されていたことが記されていますが、それはムスリムにとって家庭を形成するための拘束力を持つモデルではなく、慣習に従った推奨といった性質のものです。さらに、一家の主婦が家庭や社会において果たしている役割も、過小評価されるべきではない重要なものです。

女性は財産や取引に関しても男性と同等であり、女性であるという理由だけで何らかの制限を受けるようなことがあってはなりません。女性は貿易や借金などについても、法的に男性と同等の権利や資格を有しています。イスラームは男性も女性も区別することなく、働き糧を得ることを勧めているのです。『人間は、その努力したもの以外、何も得ることは

できない』（第53章第39節）、『男たちは、その稼ぎに応じて分け前があり、女たちにも、その稼ぎに応じて分け前がある』（第4章第32節）とクルアーンにも説かれています。

イスラームが人間関係や商取引において定めた誠実さや信頼、正しい言葉を使う態度、約束の遵守、そして相手の弱さや知識のなさ、あるいは困難な状況を悪用しないことといった一般的な原則に従うことを条件に、男性も女性も皆、合法的な手段で獲得した利益を手にする権利があります。

要するに、イスラームでは男女の先天的な生理学的・心理学的な相違を除き、男女の間に区別は設けていません。男性に与えられている基本的な権利と自由は、女性にも同じように与えられているのです。したがって、以下のような基本的な権利において男女の区別はありません。生き方、物質的・精神的所有物の保持、発展、個人としての自由、信用、良心、信仰の自由、財産とその処分の権利、合法的手段によって益を得るため裁判に訴える権利、住居不可侵の権利、名誉と誇りの保護、結婚の権利、プライバシーの保護、生活の保障などです。さらに、宗教的な責任やイバーダート（崇拝行為）、道徳的な価値や徳においても男女の間に差は存在しません。イスラームにおける人の価値は、唯一タクワ（アッラーを畏れ、罪から遠ざかること）によってはかられるのです。

F　環境についての考え方

この世界には驚異的な秩序や調和、均衡があります。崇高なるアッラーは、世界をすべての被造物に最適な状態に創造され、人間に託されました。すべての被造物を支配する神のカリフ（代理人）としてこの地に送られた人間にとって、自分達に託された自然界を守ることは基本的な義務です。クルアーンではこのことについて、『かれは大地からあなたがたを造化され、そこに住まわせられた』（第11章第61節）と記しています。したがって、自然

環境を破壊するような行動はすべて、アッラーの定められた法を乱そうとすることであると認識しなければなりません

の均衡を損なうような考え方や行いはすべて、クルアーンのこのメッセージと対立するものとなります。ムスリム（イスラーム教徒）はこうした認識に基づき、この世界の素晴らしい秩序・調和・均衡を守り、後に続く世代にそのままの姿で残せるよう、できる限りの努力を払う必要があります。自然を破壊し蹂躙するような行為や振舞いは慎むべきです。

イスラームにおける環境についての考え方は、信仰に由来するものです。天と地に存在する最小の被造物から最大の被造物に至るまで生きとし生けるもののすべてが、信仰し熟考する人々にとって、物理的な価値を超える精神的な価値を持っています。なぜなら、それらはすべてアッラーによって創造されたものであるからです。この世界のすべてはアッラーの作品です。この世界のすべての被造物は存在すること自体でアッラーを称え、そして、地を歩く動物達や鳥達が私達と同様にそれぞれウンマ（イスラーム共同体）をつくっていることが、クルアーンでは明らかにされています。したがって自然を守ることは、アッラーの印の一つとしてその価値を認識することであり、それに対して自然を損なうことはアッラーに対する恩知らずな態度とみなされるのです。

自然界の法則は、アッラーによって定められたものです。クルアーンではそれを『天と地の大権はかれのものである。かれは子をもうけられず、またその大権に（参与する）協力者もなく、一切のものを創造して、規則正しく秩序づけられる』（第25章第2節）と言い表しています。通常の条件の下では、自然界は自らの環境のバランスを保つことができます。しかし、人間の手によって過度に破壊されたり汚されると、このバランスは崩れてしまいます。環境を破壊するような行動はすべて、アッラーの定められた法を乱そうとすることであると認識しなければなりません。

預言者ムハンマドはマッカ、マディーナ、ターイフ、そしてそれらの周辺の地を現代の自然保護区域のように定めまし

自然の均衡を損なうような考え方や行いはすべて、クルアーンのメッセージと対立するものとなります

た。そこでは流血をはじめ動物を屠ること、草を抜くこと、木を切ることも禁止されていました。これはイスラームが環境保護や居住地の破壊の防止、自然界の均衡保持のためにとった施策の最初の例です。預言者ムハンマドはさらに、政治課題として環境問題に取り組み、空き地を耕作地として活用しました。そして、環境保護や汚染防止のための整備に多くの言葉を費やし、ムスリムにそれらを行うように推奨し、自らも実践しました。ムスリムはこうした預言者ムハンマドの言行に従い、常に環境に留意しなければならないのです。

G　ハラール（勧められていること）とハラーム（禁止されていること）

ハラールとは宗教上禁じられず許容されているものを意味し、アッラーとその使徒がハラールと定義され、あるいはそれが罪ではないと示されたことをいいます。また、ある行動もしくは物事について、禁止されているという明らかな証拠がない場合も、それはハラールとなります。なぜなら物事の本質はハラールであるからです。つまり、宗教上明らかに禁止され、あるいは法に触れるものでない限り、それはハラールであり合法なのです。

ハラームとは宗教用語としては、禁止すべき絶対的な根拠を持ち、かつ明白にアッラーとその使徒が確かに禁じたものを指します。ハラームほど絶対的ではない根拠で禁じられている場合、それはマクルーフ（好ましくないもの、避けるべきもの）と呼ばれます。

崇高なるアッラーは、不潔でなく、人の健康にとって有益であるものをハラール、不潔で有害なものをハラームとされました。ハラームを定めることができるのはアッラーのみです。クルアーンでは、『言ってやるがいい。「アッラーがしもべたちに与えられた、かれからの（賜物）や、食料として（与えられた）清浄なものを、誰が禁じたのか。」言ってやるがいい。「これらのものは、現世の信仰する者たちのためのものであり、特に審判の日には完全に信者の専有するものとなる。」われはこのように印を、理解ある人々に解明する』（第7章第3節）と仰せられています。

預言者ムハンマドもクルアーンやそれ以外にアッラーからもたらされた見解に基づき、いくつかのものをハラームとしました。これはアッラーの見解に準拠して定められたものであるため、アッラーがハラームとされたものとみなされます。

アッラーがハラール（勧められていること）とされたものをハラーム（禁止されていること）といったり、ハラームとされたものをハラールということはイスラームへの敵対を意味します。

ハラーム、あるいはハラームへ人を向かわせるようなものを避けることが必要なように、ハラームの疑いがあるものから遠ざかることもまた、推奨されています。預言者ムハンマドは、「ハラームは明白であり、ハラールも明白である。この両者の間にはハラームかハラールか疑わしいものがある。疑わしいものを避ける人は教えを守ったことになる」と述べています。

たとえ良い意志から発した行為であっても、その行為がハラームであれば、ハラームがハラールとなることはありません。ただし、クルアーンで次のように述べられているように、どうしようもなく必要に迫られた場合には、ハラームがハラールとなることもあります。

『かれがあなたがたに、（食べることを）禁じられるものは、死肉、血、豚肉、およびアッラー以外（の名）で供えられたものである。だが故意に違反せず、また法を越えず必要に迫られた場合は罪にはならない。アッラーは寛容にして慈悲深い方であられる』（第2章第173節）

アッラーを何ものかと同等とみなすことは、イスラームの教えに対する冒涜であり、ハラームの最たるものであり、最大の罪です。人が悔悟しない限り、アッラーはこの罪を許されません。人の命を奪うことも大きな罪です。クルアーンでは、正当な権利なく人を殺すことを、人類全員を殺害するに等しい程の罪としています。またクルアーンでは、『信仰する者よ、あなたがたの財産を、不正にあなたがたの間で浪費してはならない。だがお互いの善意による、商売上の場合は別である。またあなたがた自身を、殺し（たり害し）てはならない。誠にアッラーはあなたがたに慈悲深くあられる』（第4章第20節）と命じられています。

占いをすることやさせること、アルコール分を含んだ飲み物を口にすること、賭博によって稼ぐこと、くじや競馬など運を当てにした娯楽もハラーム（禁止されていること）です。当人や家族に大きな害を与えるアルコールや薬物も禁じられています

利子や高利貸し、他人の財産を横領することは禁じられています。クルアーンでは売買や貸借はハラールであり、利子はハラームであると明示しています。占いをすることやさせること、アルコール分を含んだ飲み物を口にすること、賭博によって稼ぐこと、くじや競馬など運を当てにした娯楽もハラームです。当人や家族に大きな害を与えるアルコールや薬物も禁じられています。

これらと並び礼拝・断食・巡礼・喜捨といった義務を放棄すること、両親への反抗、窃盗、嘘をつくこと、偽りの証言をすること、中傷、暴虐行為、信託への裏切り、贈収賄、秤を偽ること、無駄遣い、陰口、孤児の財産を横領することなどもハラームです。

H　ハラールによる利益

イスラームは生活のすべての面を視野に入れ、あらゆることにおいて人々を導き、幸福を獲得させることを目標としています。そのため、イバーダート（崇拝行為）についてと同様、飲食、服装、楽しみ、家族内の関係、社会生活、人間関係といった生活のさまざまな領域で人を正しく導けるように、命令や禁止事項を設けたのです。

ムスリム（イスラーム教徒）は自分や家族の必要とするものをハラール（勧められていること）である手段によって獲得するように努め、ハラーム（禁止されていること）を避けなければなりません。なぜなら、ハラームである手段によって得た利益は、この世では搾取や弾圧や分裂を、あの世では罰をもたらすことになるからです。

崇高なるアッラーは、『あなたがたの財産を、不正にあなたがたの間で浪費してはならない』と命じています。預言者ムハンマドもハラームにあたる財産を持っている人のドゥアー（祈り）やイバーダートは承認されないことを明らかにしています。髪を振り乱し、埃や泥にまみれ、手を天に差し上げて「アッラーよ！」と祈りながらも、実はハラームであるものを飲み食いし、ハラームの衣装を身につけ、ハラームによって糧を得ている人の祈りがどうして承認されよう、と預言者ムハンマドは語っています。

ハラールの道で利益を得なければいけないように、そこから得た利益は無駄にすることなく、清廉でハラールであるこ

とに費やすこともまた必要です。クルアーンでは、『人びとよ、地上にあるものの中良い合法なものを食べて、悪魔の歩みに従ってはならない』（第2章第168節）、『信仰する者よ、われがあなたがたに与えた良いものを食べなさい。そしてアッラーに感謝しなさい。もしあなたがたが本当に、かれに仕えるのであるならば』（第2章第172節）と命じています。預言者ムハンマドも、「無駄使いをすることなく、うぬぼれず飲みものや食べものを口にし衣服をまといなさい。そして貧しき者を助けなさい」と述べています。

1　商取引における徳

人がイスラームの決まりに従って商業活動や経済活動を行い、ハラール（勧められていること）である手段から利益を得ることは、イバーダート（崇拝行為）として承認されます。ただし、商取引がイバーダートとして承認されるためには、守られなければならない道徳的な原則がいくつかあります。

商人は正直に話し、顧客に信用してもらわなければなりません。預言者ムハンマドは、「正しく話し、自らを信用させる商人は、あの世でも預言者達、誠実な者達、殉教者達と共にいるだろう」と述べています。

相手の不注意や無知を利用して欺くことは、イスラームの法に適うことではありません。預言者ムハンマドは下の方が湿っている麦を売っていた人に、「なぜ、湿っている方が人々に見えるように、麦をかざさなかったのか」と厳しく叱責した上で、「私達を欺く者は、私達の仲間ではない」と断言しました。別のハディース（預言者ムハンマドの言行録）では、欠陥商品をそのことを隠して売ることはムスリム（イスラーム教徒）にとってハラールではない、と明言しています。

嘘をつくこと、そして偽りの証言をすることは大きな罪です。崇高なるアッラーは、些少な利益のためにアッラーの名をもって人を欺く人達に対しては、最後の審判の日にその者の顔をご覧になることも、話をお聞きになることもないでし

ムスリム（イスラーム教徒）は自分の家族の必要とするものをハラール（勧められていること）である手段によって獲得するように努めなければなりません

ょう。預言者ムハンマドはあるハディースでそのことにふれ、アッラーは審判の日、「うぬぼれて服をひきずりながら歩く者、善を施した時にそれを恩に着せる者、偽って品物を不当な価格で売る者」の話をお聞きにならないこと、慈悲の眼差しで彼らの顔をご覧になることがないこと、そして罰が与えられることを告げています。

秤を策略をめぐらせることなく公正に用いることは、クルアーンで命じられていることです。秤を不正に用いることは社会を根底から揺るがし、崩壊や滅亡を引き起こすもとになる犯罪的な行為です。クルアーンにはシュアイブ（過去に派遣された預言者の一人）が預言者として遣わされたマドヤン・アイカ族の滅亡は、秤を公正に用いずペテンを行ったことが原因の一つであったと記されています。

品物をためこみ流通を阻害すれば、価格は上昇し通常の市場価格よりも高く吊り上げることになります。このようなことが特に必需品に対して行われた場合、社会は害を被り、長期間続けられると社会的・経済的危機が生じる可能性があります。預言者ムハンマドは、「闇市場を操る者とは、なんと悪い者であることか。価格が下がったのを知ると悲しみ、上がったのを知って喜ぶ」と言い、このような人間が陥った心のあり様を説明しています。

闇市場が禁じられているように、物価を人為的に吊り上げるブローカー行為も禁じられています。預言者ムハンマドは生産者と消費者双方の被害を防ぐため、郊外から品物を運んでくる人達を途中で待ち受け、品物を安く買い叩く行為を禁止しました。「都市に住む者が、村から来た者の名で物を売ってはいけない。本来のあり方で物を流通させなさい。アッラーはそれぞれに糧を与えられる」と述べています。

商取引においては、買い手と売り手の双方が良く振舞い、必要があれば双方が自己犠牲の精神を発揮しなければなりません。預言者ムハンマドは、アッラーが良く振舞っている買い手と売り手の双方に慈しみと愛情を下されることについて、「品物を売る時も、買う時も、借金を頼む時も返す時も、気前よく行う人に、アッラーの慈しみがありますように」と述べています。

同様に、品物の価格や需要を高めるために流通量を調整して消費を煽るのも、不正な商行為です。自由競争を妨げ不正な競争をもたらし、人々の関係を損ない消費者が害を被ることとなるこの種の行為は、イスラームで禁止されています。預言者ムハンマドも、「品物を買うふりをして、その価値を高めようとしてはいけない」「消費者を苦しめてはいけない。誰でも兄弟たちの間でまとまった契約を解約させるために、さらなる契約の申し込みをしてはならない」と忠告しています。

商業活動において取引の内容は明白に記されるべきであり、そうでなければ悪しき結果を生む原因ともなります。イスラームは取引の当事者は秤を公正に用い、互いに良い感情や信頼を持つことを求めると同時に、取引や貸し借りを記録することも勧めています。クルアーンでは、『あなたがた信仰する者よ、あなたがたが期間を定めて貸借する時は、それを記録にとどめなさい。あなたがたのことがらを公正な記録者に記録させる。記録者は、アッラーが教えられたように記録し、書くのを拒むことはできない。それでかれに記録させなさい。債務者に口述させなさい。かれの主アッラーを畏れ、少しもそれを少なく言ってはならない』（第２章第２８２節）と命じられ、記録にとどめる重要さを示されています。

2 雇用者と被雇用者の関係

雇用者と被雇用者との結びつきは対立ではなく、融和や友情、相互扶助、そして法と正義の原則の上に打ち立てられなければなりません。そして、雇用者と被雇用者の双方は利益をハラール（勧められていること）の道から得られるように努力すべきです。

労働者に与えられる給与や報奨は、彼らが行なった仕事の対価です。したがって、労働者は報奨に応じて集中し効率よく仕事に取り組む必要があります。預言者ムハンマドは、「アッラーは、その仕事をきちんと、細心の注意を払って行う者を愛される」と述べています。契約上、定められた業務時間帯に、通常の効率を保って働くことは労働者の義務です。仕事時間中に仕事を放棄したり職務を果たさない労働者は、背信行為をしたことになり、雇用者の権利を侵害したことになります。

仕事を引き受けた人は、それを他の人にやらせることはできません。報奨への正当な権利を手にするためには、自らの仕事を自らの手で行う必要があります。期限をきって仕事を完成させると約束した人は、定められた期限内に仕事を完了させなければなりません。クルアーンでも、

雇用者は被雇用者の権利を守り、彼らに慈しみといたわりを持って接しなければなりません

『約束を守りなさい』（第5章第1節）と命じています。ただし、労働者は故意ではなく、やむをえない理由で仕事を遅らせた場合には、その責任は問われません。

自分に任された仕事で使う資材や道具などの保守管理も、労働者の役目です。なぜなら仕事場や機械、あらゆる材料や資材は労働者に託されたものであるからです。この託されたものを自分の財産であるかのように守り、管理しなければならないのです。預言者ムハンマドも、「あなた方は皆それぞれが管理人であり、管理下にあるものに対し責任を負う」と述べています。したがって、労働者は職場にあるものを自らの利益のために許可を得ずに使ってはいけないのです。雇用者の財産を許可を得ずに他者に与えたり、職場の電話や車を私用に使うこと、あるいはそれに類する行為は雇用者の権利の侵害になります。

雇用者は被雇用者の権利を守り、彼らに慈しみといたわりを持って接しなければなりません。これは雇用者の義務であると同時に、職場を活気づけ生産能力を増し、より働きやすい環境をつくることにもなります。またそのことに関連して、雇用者がそれぞれの業務に対する報酬を不足なく遅滞なく支払うことも大切なことです。預言者ムハンマドは、崇高なるアッラーは労働者を雇いながらその権利を完全に与えない人を審判の日にはお許しにならない、と教えています。「労働者の報酬は、額の汗が乾かないうちに支払いなさい」とも述べています。

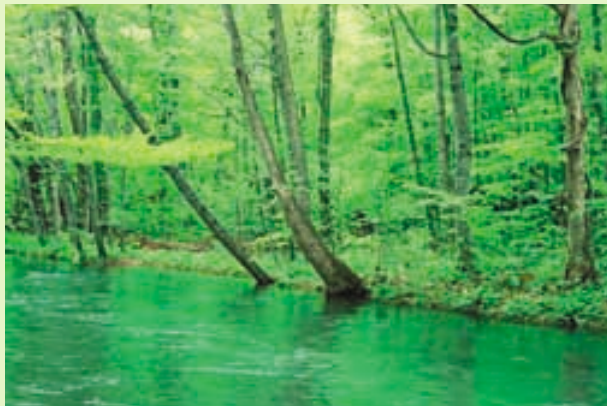
雇用者は被雇用者の健康に配慮して労働環境を整えなければなりません。また、被雇用者が礼拝、断食といったイバーダート（崇拝行為）を行う権利や社会的な権利を行使できるよう、それに適した環境を準備することも必要です。雇用者はその強い立場を利用して労働者を抑圧したり、契約で決められた以上の仕事をさせることは避けなければなりません。それは労働者の権利の侵害であり、労働者に対する抑圧であるからです。抑圧することはハラーム（禁止されていること）です。

I　信者の日々の生活

ムスリム（イスラーム教徒）の日々の生活での振舞いや行動はすべてアッラーによって記録されています。来世におい

てアッラーの御前ですべての勘定が問われ、現世での行いに応じて罰や報奨が与えられることを信じている人は、常にそのことを念頭において生きています。このような篤い信仰心を抱いている信者は、現世のために来世を犠牲にすることも、来世のために現世を犠牲にすることもなく、常に来世と現世のバランスを考えながら暮らしています。

信仰が消えることなく輝き続け、それがさらに力を増すか否かは、アッラーのしもべとしての務めを果たすか否かにかかっています。しもべとしての務めとは、アッラーと預言者ムハンマドのご命令と禁止事項に従って生きることです。サラート（礼拝）・サウム（断食）・ザカート（喜捨）・ハッジ（巡礼）がそれぞれしもべとしての務めであるのと同様に、商取引における正直さや社会生活における相互扶助、友情、学問の追究とそのための忍耐、工場の健全な稼動や管理者としての公正さなども、それぞれがイバーダート（崇拝行為）なのです。

したがって、しもべという自覚をもつ信者は、『定めの時が訪れるまで、あなたの主に仕えなさい』（第15章第99節）というクルアーンの章句に従って行動し、すべての行いをイバーダートに昇華させます。朝目覚めるときちんと身づくろいをし、しもべとしての務めを行います。仕事に行くと、任された作業を手際よく行うことができるように注意を払います。ハラール（勧められていること）の道から利

言ってやるがいい。「あなたがたは考えないのか。
もしある朝、あなたがたの水が地下に沈み去ったならば、湧き出る水を、
あなたがたにもたらし得るものは、一体誰であるのか。」
《聖クルアーン第67章第30節》

益を得、ハラールであるものを食します。話すときは正しいことを話し、約束をすればそれを守ります。このような信者は清潔で、正直で、誠実で、いたわりを持つ人となります。無駄で何の得るところもないものからは顔を背け、ザカートを施し高潔さを守り、あらゆる面で過度に陥ることを避けます。信託されたものはきちんと守ります。アッラーと預言者ムハンマドと信者達を愛します。被造物を愛し、人々の権利を守る一方、酒や賭博、姦通、賄賂、闇市場、利子、あるいは自己中心主義、弾圧、偽善、妬みといった社会や個人にとって害となる感情や行動から遠ざかります。

信者は信仰が要請するものとして良いもの、正義、誠実さ、ハラールとハラーム（禁じられていること）の区別、高潔さ、徳、恥を知ることなどに重きを置きます。

助けを求めている人がいれば、できる限りのことをして助けようとします。誰かを傷つけたり、誰かと衝突することもありません。他者の権利を自分の権利と、他者の財産を自分の財産と、他者の高潔さを自分の高潔さと同等に、大切で不可侵であると認めるのです。

近しい人々や貧しい人々にザカートやサダカ（施し）を行い援助します。もし余力があれば必要とされる地域に、モスクや学校、病院、道路、泉など人々に役立つ施設を建設します。

良いことや有益なことを一つやり遂げると、新たに良いことに取りかかります。それだけに満足せず、良い振舞いをすることだけに安らぎを見出します。そうして、その人の内面において善は空気や水のような存在となるのです。

自分にはできないような善行を積む人を愛し、自らもそうした行動がとれるような存在でありたいといった望みを抱いて生きていきます。

J　人の権利

イスラームは人間を奴隷と主人、貧しい人と豊かな人、血筋のよい人とそうでない人、女性と男性といったように区別し差別することを禁じています。そして、根本的にすべての人間は一本の櫛の歯のように平等であると明言し、人が生まれながらに持っている人間としての権利を認めています。

人は皆、生きる権利や物質的・精神的な所有物を守り、発展させる権利を持っています。イスラームは人の生命に大きな重要性を置いています。限られた場合を除き、人を殺害することは最大の罪であり全人類を殺害するに等しい行為で、一人の命を助けることはすべての人を助けることと同等な行為であるとみなされます。

預言者ムハンマドは別れの説教で、「皆さん！この日々が祝福されたものであり、この月が祝福されたものであり、このマッカの町が祝福されたものであると同様に、あなた方の命・財産・名誉もまた祝福されたものです。あらゆる侵害から守られるべきものなのです」と述べ、命や財産、人としての権利が保証されたものであることをすべての人に宣言したのです。

あらゆる迫害、人の暮らしや健康や誇りを損なうことは絶対的なハラーム（禁止されていること）とされています。クルアーンでは、『不義を行う者を、アッラーは疎かになされると考えてはならない。かれは（恐れのために）目が坐る日まで、かれらに猶予を与えられるだけである』（第14章第42節）と示されています。預言者ムハンマドも、「不義を行うことを避けなさい。なぜならそれは、審判の日、大きな罪として罰せられる」「この世で人を迫害する者を、アッラーは罰せられる」と述べています。

人の権利と自由を尊重するイスラームは、他者の人格を損なわないように戒めています。すなわち、個人のプライバシーを認め、恥を暴いたり、陰口をたたいたり、悪口を言いふらしたりすることを悪しき行為として禁じています。また他人の家に許可なく入ることを禁止し、自分の家に入る時にも入り口から入り、家族の者の寝室に入る時は許可を求めるよう命じています。

人間らしく生きること、つまり人の権利において最も重要なものの一つが、宗教と良心の自由です。人はいっさいの圧力や強制を受けることなく考え、自分の知性で物事を判断し、知性を働かせ真実を見出すべきです。宗教や信仰というものは人の良心とかかわるものであり、弾圧から生じる信仰には何の価値もありません。クルアーンでも、「宗教に強制があってはならない」と明記されています。

誰の信仰に対しても圧力をかけてはなりません。啓示の伝達を託された預言者に対してさえ、その任務は人々に啓示を伝えることだけであり、啓示の伝達以降に人が定めたことについてはその責任を負わない、と告げられています。

『もし主の御心なら、地上のすべての者はすべて信仰に入ったことであろう。あなたは人びとを、強いて信者にしよう

とするのか』（第10章第99節）

『だからあなたは訓戒しなさい。本当にあなたは一人の訓戒者に他ならない。かれらのための、支配者ではない』（第88章第21節―22節）

『もしかれらが背き去っても、われはかれらへの見張り人として、あなたを遣わした訳ではない。あなた（の務め）は、（啓示の）伝達だけである』（第42章第48節）

要するにイスラームでは、クルアーンで『だから誰でも望みのままに信仰させ、また（望みのままに）拒否させなさい』（第18章第29節）と述べられているように、人は自由に宗教を選び、その教えを実践することができるのです。

困難な経験を経て結ばれたマディーナ条約においても、すべての人々に宗教と良心の自由が保証され、それにふさわしい地位が与えられました。すなわち預言者ムハンマドは、マッカからマディーナへの聖遷後に宣言したマディーナ条約（マディーナ憲法）において、「ユダヤ教徒の教えは彼らのものであり、イスラーム教徒の教えも彼らのものである」という法を定めたのです。

預言者ムハンマドはナジュランという地方のキリスト教徒との間で結んだ条約で、イスラームにおける宗教と良心の自由のあり方を示しています。「彼らの財産、命、宗教生活、その実践、家族、教会、そしてその大小にかかわらず彼らが所有するすべてのものはアッラーの庇護のもとにあ

万民への警告者とするために、かれのしもべに識別を下された方に祝福あれ。
《聖クルアーン第25章第1節》
天と地の大権はかれの有である。かれは子をもうけられず、
またその大権に（参与する）協力者もなく、一切のものを創造して、
規則正しく秩序づけられる。
《聖クルアーン第25章第2節》

り、アッラーの使徒ムハンマドの負債であり、ナジュランの人々と彼らに従う者達がその権利を持つ。司教は自分の教区の外に追放されることはなく、神父は自らの教会から追放されることはなく、修道士は自らの修道院から追放されることはない」。

預言者ムハンマドは、彼に会うためにマディーナを訪れたナジュランからの一団が礼拝することを願い出ると、マディーナ・モスクを指し示し、ムスリム（イスラーム教徒）がサラートを行うこの聖なる場所で彼らがキリスト教のサラートを行うことを許しました。預言者ムハンマドはナジュランの民同様、イエメンの人々にも宗教上の自由を広く与えました。彼らがイスラームではない自分達の教えを学び、子供達に教える自由を認めたのです。

人間としての権利が保証されると同様に、法の下の平等や家族の形成、労働、選択といった権利もすべて承認され保証されたのです。

K ジハード（奮闘努力すること）の概念

ジハードという言葉は、辞書では「努力すること、奮闘すること、力を振るうこと、何かを成し遂げるためにできる限りの手段を用いること」という意味が示されていますが、宗教的な概念としては宗教上の命令を知り、それに従って生き、他の人にも教えること、善を行い悪を避けること、そしてイスラームの布教に努めること、自らの我欲や外部の敵と戦うことという意味になります。

クルアーンやハディースでジハードに関する記述を見ていくと、ジハードが単に戦いを意味するものではなく、あらゆる場面において奮闘努力し、善を行い悪と戦うことを意味していることは明らかです。預言者ムハンマドは、「真のジハードとは、我欲との戦いである」と述べています。したがってジハードは、アッラーにしもべとして帰依することであり、そのために誤った欲望を持たないようにすること、悪魔と戦うこと、アッラーと預言者ムハンマドが示された普遍的な基準を個人の生活で実践し、それを社会生活にも反映させるように努めること、イスラームを広めること、祖国やムスリム達をあらゆる危険や不正な攻撃から守ることなどを含む包括的な概念なのです。

武力を用いた戦いは、他に手段がない場合にのみ取ることのできる手段とされています。それは正当防衛の場合、少数派であるムスリムが弾圧を受けた場合、ムスリムとしての権利が侵害された場合、結ばれた条約が敵によって一方的に破棄された場合にのみ発動されます。クルアーンには次のように命じられています。

『あなたがたに戦いを挑む者があれば、アッラーの道のために戦え。だが侵略的であってはならない。本当にアッラーは、侵略者を愛さない』（第２章第１９０節）

『あなたがたはどうして、アッラーの道のために戦わないのか。また弱い男や女や子供たちのためにも。かれらは（祈って）言う。「主よ、この不義をなす（マッカの）住民の町から、わたしたちを救い出して下さい。そしてわたしたちに、あなたの御許から一人の保護者を立てて下さい。またわたしたちに、あなたの御許から一人の援助者を立てて下さい。」』（第４章第75節）

『だがかれらがもし誓約した後にそれを破り、あなたがたの教えを罵るならば、不信者の首長たちと戦え。本当にかれらには誓いはないのである。恐らくかれらは止めるであろう』（第９章

かれこそは、雨を天から降らす方である。
われはこれをもってすべてのもの（植物）の芽を萌え出させ、
次に新緑（の群葉）を出させ、累々と穀物を実らせる。
またナツメヤシのさやから、（重く）垂れ下がった房（を生え出させ）、
またブドウ、オリーブ、ザクロ等、同類異種の果樹（を育てる）。
その果実が結び、そして成熟するのを観察しなさい。
その中には本当に信仰する人びとへの印がある。
《聖クルアーン第6章第99節》

第11節）
　戦争は布教の手段ではありません。クルアーンは強制による入信を認めず、望む者は入信し、望まぬ者はイスラームを認めないのであるからそれでいいということを一般的な原理として示しています。預言者ムハンマドは人々にイスラームを強制することだけでなく、ムスリム（イスラーム教徒）となった教友が他の宗教を信じる自分の子供達に教えを強制する行為さえ非難しています。
　また、預言者ムハンマドはナジュランのキリスト教徒と結んだ条約によって、彼らの教えを表す象徴を自由に示すことを許可しました。他の宗教の信者が、モスクで崇拝行為を行うことも許しました。歴史を振り返ってみても、たとえば祖国で迫害を受けたユダヤ教徒やキリスト教徒がイスラームの国家に助けを求め、庇護されたような例はたくさんあります。『迫害がなくなって、この教義がアッラーのため（最も有力なもの）になるまでかれらに対して戦え。だがもしかれらが（戦いを）止めたならば、悪を行う者以外に対し、敵意を持つべきではない』（第2章第１９３節）というクルアーンの一節は、弾圧や分断、テロや社会秩序の破壊などの迫害と戦うことが、社会的な義務であることを示しています。それに続く節は、戦いの命令が迫害と弾圧に対して下されたものであることを明示しています。現代の文明社会においても、信仰や思想に対する弾圧や迫害は認められず、国際的な法による解決が図られています。
　布教は強制によってではなく、十分な説得に基づいて行われるべきものです。クルアーンでは『英知と良い話し方で、（すべての者を）あなたの主の道に招け。最善の態度でかれらと議論しなさい。あなたの主は、かれの道から迷う者と、また導かれる者を最もよく知っておられる』（第16章第１２５節）と命じられています。
　布教は強制や脅迫によらず、生き方についての助言を通して行なうことが王道とされています。イスラームを憎悪しムスリムを迫害する敵に対してさえも、アッラーの道へと優しく呼びかけることが勧められているのです。アッラーを信じそのしもべとなることは、本人の自由意志に委ねられています。このようにイスラームは宗教の自由な選択を推進してきたにもかかわらず、イスラームを強制や戦争によって教えを受け入れさせようとしてきたとみなすことは公正ではありません。

L　テロ

テロはイスラームでは厳しく禁じられています。イスラームの根本は平和・融和・寛容にあり、そもそも〝イスラーム〟という名称自体がそういう意味を持つ言葉なのです。本来そうした意味を持つイスラームの教えは、人間関係を愛情やいたわり、兄弟愛によって成り立たせること、単に人間だけでなく地上のあらゆる生物に慈悲をもって接することを命じています。

ことに罪のない人々や老人、女性や子供達に対し、罪があるかどうかを問うこともなく命や財産を奪うテロは人類に対する罪であり、テロを計画・実行したのが誰であろうと、またテロがいかなる名前で呼ばれようとも厳しく禁じられています。

預言者ムハンマドは戦いの最中であっても、ムスリム（イスラーム教徒）と戦っていないムスリムでない女性や子供、老人、イバーダート（崇拝行為）を行う宗教者を殺害すること、さらにはイバーダートの場を破壊したり木を切ったり動物を殺すことを禁じていました。預言者ムハンマドは自らも戦った戦役で女性が殺されるのを目撃し、それ以降女性と子供の殺害を禁じたのです。

罪もない人々の血を流し人々を恐怖に陥れ、社会の秩序を乱す人類に対する犯罪であるテロは、イスラームやジハード（奮闘努力すること）の概念とはまったく関係のないものです。逆にジハードの概念にはテロとの戦いも含まれているのです。

罪もない人々の血を流し人々を恐怖に陥れ、社会の秩序を乱す人類に対する犯罪であるテロは、イスラームでは厳しく禁じられています

M　徳とその模範たる預言者ムハンマド

イスラームの教えの本質を形づくっているのは徳です。良き人間であるためには徳を持っていなければなりません。クルアーンには良い態度を保ち、悪い態度を退けることを命じる多くの節があり、それらはイスラームが徳をいかに重視しているかを明白に物語るものです。良い態度とは公正さ、約束を守ること、許しあうこと、謙虚さ、両親を傷つけないこと、愛情、兄弟愛、平和、信頼、正義、団結、協調性、恵み深さ、高潔、気前のよさ、寛容、心地よい言葉と笑顔、きれいな心などのことです。一方悪い態度というのは迫害、不正、偽善、妬み、中傷、醜い発言、不機嫌を表すこと、物惜しみすること、自己中心主義、嫉妬、うぬぼれ、憎悪、悪意、無駄使い、敗北主義などです。

預言者ムハンマドは、「信者のうち信仰が最も成熟している者とは、最も高い徳を持つ者のことである」「あなた方のうち私が最も愛する者、そして審判の日に私に最も近い者とは、徳が最も高い者である」と述べています。また、徳を自ら示して皆の模範となり、「私は徳を完成させるために遣わされた」と述べています。預言者ムハンマドの徳についてクルアーンには、『本当にあなたは、崇高な徳性を備え

われは天から適量の雨を降らせ、それを地中に止まらせる。
またわれは、それを無くすこともできる。
《聖クルアーン第23章第18節》

ている』（第68章第4節）と言及されています。
この崇高な徳によって、預言者ムハンマドはすべての人々の模範になっています。クルアーンには、『本当にアッラーの使徒は、アッラーと終末の日を熱望する者、アッラーを多く唱念する者にとって、立派な模範であった』（第33章第21節）と記されています。
預言者ムハンマドは笑顔と上品さと細やかな心遣いを持ち、無慈悲や冷酷な仕打ちをしたり、人を傷つけるような方ではありませんでした。冷酷なあるいは品のない言葉を口にすることはありませんでした。他の人を批判したり、面と向かってその人の恥となるようなことを口に出すこともありませんでした。過った行為を目にした時は、「このようなことをしている人がいるようだ」とそれとなく言って過ちをただすように促し、過ちを犯した人を名指して傷つけることもありませんでした。
人の話は決して中断することなく終わりまできちんと聞きました。必要のない議論は好まず、必要以上に長々と話すこともありませんでした。自分と関係のないことにはかかわらず、人のプライバシーを詮索することもありませんでした。アッラーと社会に対する反逆以外、たとえ自分に対してどのような悪い行為がなされようとも許し、復讐することは考えませんでした。
預言者ムハンマドはこの上なく高潔で、恥を知る方でした。すべての人々を平等に考え、富んだ者や貧しき者、主人や奴隷などと区別しませんでした。あらゆる面において人々から信頼を受けていました。常に誠実で冗談は言っても嘘はつかず、そのためまだ預言者としての任務を始める以前から「信頼できるムハンマド」と呼ばれていました。預言者であることが知られるようになった時、イスラームに帰依しなかった人達でさえ、彼のことを「嘘つきだ」「嘘を言っている」と言わなかったのです。
預言者ムハンマドは他の人々も皆、自分のように誠実で正しくあるように望みました。そして常に、「正しさから離れてはいけない。正しさは善と益をもたらす。善は人を天国へ導く。悪は人を地獄へと導く。人は嘘をつき続けていくうちに、アッラーの御前において嘘をつく人と記録される」と語っていました。
預言者ムハンマドは非常に気前のいい方でした。彼を訪ねた人は手ぶらで戻ってくることはありませんでした。集会に参加した時は自分に席を譲ろうとして人が立ち上がるのを好まず、空いている場所を見つけて座りました。友人達の間に

座る時は足を伸ばすこともありませんでした。教友達は預言者の仕事を助けることを自分達にとっての栄誉とみなし、恩義すら感じていましたが、預言者ムハンマドは自分のことはすべて自ら行い、妻達の仕事も助けていました。称えられたり、過度に敬意を示されることを好みませんでした。貧しい人達と共に過ごし、身寄りのない人や未亡人らの手助けをすることを喜びました。目の前にあるものを食べ着、何かが気にいらないというようなこともありませんでした。食べるものがなければ空腹のまま眠りました。

すべての仕事を秩序づけ調和させて行い、サラート（礼拝）やイバーダート（崇拝行為）の時間、睡眠や休息のための時間、客や訪問者のための時間と常に明確に区分していました。そして、時間を無駄に過ごすことなく有益に使いました。「多くの人が気づいていない二つの恵みがある。一つは健康であり、もう一つは時である」と述べています。

幼少の頃から約十年間、預言者ムハンマドに仕えた教友アナスは、預言者ムハンマドの人柄についてこう述懐しています。

「私はアッラーの使徒に十年間お仕えしました。この間一度たりとも〝こら、なぜこのようなことをしたのだ〟、〝どうしてこれをしておかなかったのだ〟と私をお叱りになったことはありませんでした」

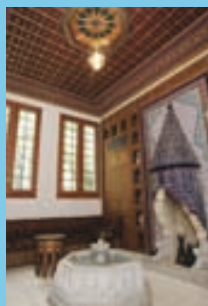
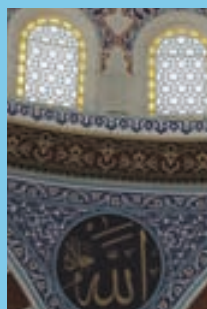
自らのために望むものは他の人のためにも望み、自らに望まないものは他の人にも望みませんでした。預言者ムハンマドの徳性には他に次のようなものがあります。あるがままを見せ、見かけどおりであり、目下の人に愛情を目上の人には敬意と寛容を持って振舞うこと。他人の過ちを詮索しないこと。怒りを静めること。約束を守ること。忠義をはたすこと。正しさや誠実さを決して放棄しないこと。うぬぼれ思い上がらないこと。謙虚でいること。物惜しみや貪欲から遠ざかること。気前のいいこと。忍耐強さ。公正であること。物質的・精神的な清潔さに配慮すること。健康に注意を払うこと。時を有効に生かすこと。

預言者ムハンマドが自ら実践することによって示したこの道徳のあり方は、疑いもなくイスラームの徳を示すものであり、そして人々にとって素晴らしい模範となっています。

イスラーム

――正しい理解のために――

二〇〇七年十二月一日　初版発行

発行者　宗教法人
東京・トルコ・ディヤーナト・ジャーミイ　©2007
Tokyo Türk Diyanet Camii Vakfi
〒一五一―〇〇六五
東京都渋谷区大山町一―十九
電話（〇三）五七九〇―〇七六〇
FAX（〇三）五七九〇―七八二二
http://tokyocamii.org

宗教法人
東京・トルコ・ディヤーナト・ジャーミイ
Tokyo Türk Diyanet Camii Vakfı

〒151-0065 東京都渋谷区大山町1-19
電話（03）5790-0760　http://tokyocamii.org

東京ジャーミイ・トルコ文化センターは朝10時から夕方6時まで、
一般の見学者の皆様に開かれております。